妙福寺遺跡発掘調査報告書

－八本松飯田宅地開発事業－

２０１７

東広島市教育委員会

a．妙福寺遺跡３区完掘写真（西から）

b．妙福寺遺跡１・２区完掘写真（北から）

はしがき

東広島市は、長い歴史と伝統、恵まれた自然環境を背景にしながら、計画的なまちづくりを進めてきました。高速交通網の充実とともに、大学を中心とした学術研究機関の集積や既存産業の活性化はもとより、幅広い分野の産業が集積し、全国でもその成長が注目される都市となっています。

そして今、社会経済情勢が大きく変化する新しい時代において、「未来にはばたく国際学術研究都市～ともに育み、人が輝くまち～」の将来都市像のもと、「日本一住みよいまち」の実現に向けて全力を傾注しています。

今回発掘調査が実施された八本松飯田地区は、西条盆地の西部に位置し、穀倉地帯として田園が拡がっています。周辺には、いわゆる土居屋敷が点在しており、戦国期に中小土豪層が覇権を争い割拠した様子が伺えます。

また、ＪＲ山陽本線沿線に位置し、広島市のベットタウンとしても人気が高い地域でもあります。

本報告書は、住宅団地造成に伴って実施した発掘調査の成果を記録したものです。地域の歴史を解明する一助となり、埋蔵文化財の保護に対する理解を深めていただくための資料として広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査及び報告書作成にあたり、御指導、御協力をいただきました関係各機関、研究者の皆様及び地元の方々に対し、深く感謝いたします。

平成29年３月

東広島市教育委員会
教育長　津森　毅

例　　言

1　本書は、東広島市教育委員会（以下「市教委」という。）が発掘調査を実施した、八本松飯田宅地開発事業に係る妙福寺遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査並びに整理・報告書作成作業は、株式会社明成から委託を受けて、平成27・28（2015・2016）年度に市教委が実施した。

3　発掘調査は、市教委の主査石垣敏之、埋蔵文化財調査員吉田由弥・日浦裕子が担当し、市教委職員が協力した。

4　整理・報告書作成作業は石垣と吉田・日浦が担当し、市教委職員が協力した。

5　遺構の実測・写真撮影は、石垣・吉田・日浦が行った。

6　遺物の実測は、吉田・日浦が行った。写真撮影は石垣が行った。

7　測量用基準杭の打設は、株式会社明成が実施した。

8　本遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「妙福寺跡」として登録されていたが、調査の成果などから、寺院跡を含む集落跡「妙福寺遺跡」として扱うことが望ましいと判断し、名称及び種別の変更をしている。

9　本書の内容は調査関係者で検討し、Ⅱを日浦が、他を石垣が執筆した。編集は石垣と吉田が行った。

10　遺物実測図と写真図版の番号は同一である。

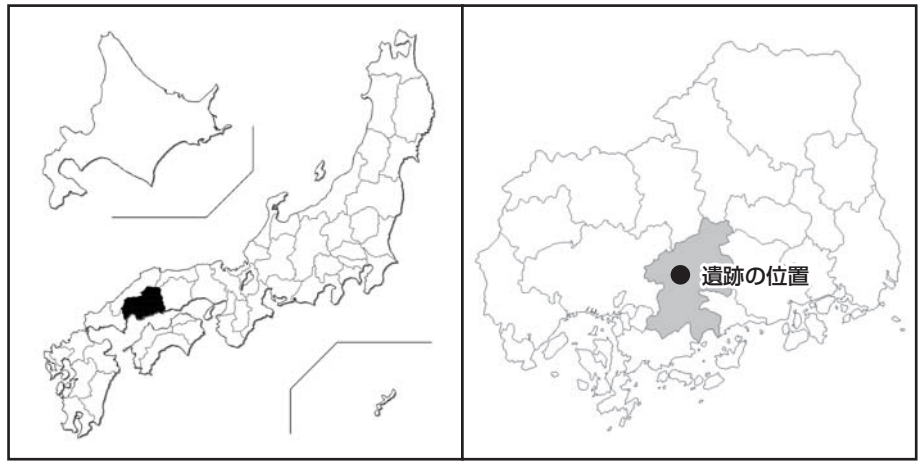
11　第1図は国土交通省国土地理院発行の　1：25,000　地形図『安芸西条』を1：40,000に縮小して使用した。第2図は東広島市発行の1：2,500　東広島市地形図（N-6）を使用した。第15図は国土地理院が保有する旧版地図「一貫田」・「西條町」（1：20,000）を1：25,000に縮小して使用した。

12　本書で使用した方位は、世界測地系座標北（国土座標第Ⅲ系）である。

13　本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。

14　SB：掘立柱建物跡、SE：井戸跡、SF：道路状遺構、SD：溝状遺構、SK：土坑、SX：性格不明遺構、P：ピット

15　調査で得られた資料については、すべて東広島市教育委員会が保管している。



広島県東広島市及び妙福寺遺跡の位置

妙福寺遺跡発掘調査報告書

目　　次

Ⅰ　はじめに　1

Ⅱ　遺跡の位置と環境　2

Ⅲ　調査の概要　5

Ⅳ　遺構と遺物　8

Ⅴ　まとめ　25

抄録・奥付

挿 図 目 次

第１図　周辺遺跡分布図（１：40,000）…… 4
第２図　妙福寺遺跡周辺地形図（１：２,500）…… 6
第３図　妙福寺遺跡遺構配置図（１：500） 7
第４図　SB１実測図（１：40）…… 9
第５図　SE１、SD８実測図（１：30）…… 10
第６図　SF１実測図（１：40）…… 11
第７図　SK１～SK４・７・８実測図（１：30） 13
第８図　SK５・SK６、P130実測図（１：30）…… 15
第９図　SD１～４・６～10、SE１、SX１～３実測図（１：80） 17
第10図　SD２～５・８～10、SE１、２区南側壁面実測図（１：30、１：40）…… 19
第11図　SD12～16実測図（１：40） 21
第12図　SX８実測図（１：30）…… 22
第13図　出土遺物実測図（１：３）…… 23
第14図　『芸藩通志』絵図（部分） 27
第15図　遺跡周辺地形図（１：25,000）…… 28

巻頭図版目次

巻頭図版a．妙福寺遺跡３区完掘写真（西から）

巻頭図版b．妙福寺遺跡１・２区完掘写真（北から）

表　目　次

表１　遺物観察表

図　版　目　次

図版１ａ．１区完掘近景（東から）
ｂ．１区SK７断面（東から）
ｃ．１区SK８断面（北から）
ｄ．１区SK４～６断面（東から）
ｅ．１区SK５焼石・炭化物出土状況（東から）
ｆ．１区SK５完掘（東から）
ｇ．１区SX８完掘（南から）
図版２ａ．１・２区完掘近景（北から）
ｂ．１区SD13～16完掘（東から）
ｃ．２区完掘近景（南から）
ｄ．２区SE１断面（南から）
ｅ．２区SE１・SD８完掘（東から）
図版３ａ．２区溝状遺構群断面（南東から）
ｂ．２区SK３完掘（東から）
ｃ．２区溝状遺構群完掘近景（北から）
ｄ．３区完掘近景（西から）
ｅ．３区SF１完掘（南から）
図版４ａ．３区SB１完掘（南から）
ｂ．３区SB１-P29断面（東から）
ｃ．３区SB１-P30断面（東から）
ｄ．３区SB１-P34・35断面（東から）
ｅ．２区SK２断面（東から）
ｆ．４区完堀近景（西から）
図版５ａ．擁壁工事立会状況（西から）
ｂ．擁壁工事立会状況（東から）
ｃ．街道の現状（遺跡の西側から）
ｄ．妙福寺古墓
ｅ．出土遺物
ｆ．出土遺物

図版扉　祠があったとされる基壇と３区SF１完掘写真（南から）

Ⅰ　は　じ　め　に

妙福寺遺跡は、八本松飯田宅地開発事業に伴って広島県東広島市八本松飯田七丁目で発掘調査が実施された。以下、調査に至る経緯を概述する。

平成25年７月30日付けで民間業者から東広島市教育委員会教育長へ文化財の有無及び取扱いについて協議があった。当該地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地「妙福寺跡」にあたるが、遺跡の詳細や遺構の粗密が不明なため、平成25年７月30日付けで試掘調査が必要な旨を回答した。平成25年８月22日付けで試掘調査の依頼があり、市教委が試掘調査を実施した。その結果、掘立柱建物跡の柱穴と考えられるピットを多数検出したため、平成25年９月３日付けで妙福寺跡を確認したことを回答した。市教委と事業者で協議を重ねた結果、当面は開発を行わないこととなった。その後、当初協議の南側半分の範囲で団地造成の届出がされたが、大部分を盛土保存することとなり、擁壁などの施工に伴って、一部を工事立会している。

今回の発掘調査の対象となった開発行為は、当初協議の北側半分で、平成27年１月28日付けで、株式会社明成から埋蔵文化財発掘の届出（土木工事の届出）が提出された。市教委と事業者で協議を重ねた結果、大部分は盛土保存することとなったが、団地内道路部分については現状保存が困難であると判断され、記録保存のための事前の発掘調査が必要な旨を平成27年２月23日付けで通知した。

平成27年３月17日付けで株式会社明成から市教委あてに発掘調査の依頼が提出され、平成27年３月24日に承諾する旨回答した。平成27年４月３日付けで発掘調査の業務委託契約が締結され、平成27年４月15日から６月10日まで発掘調査を実施した。また、調査期間中の５月14・15日に地元の方々を対象にした遺跡見学会を実施したところ、延べ32人の参加を得た。

なお、「妙福寺跡」の発掘調査の結果、今回の調査区域からは、中世の寺院跡と直接結びつけられるような遺構は検出されなかったこと、調査区域の北側に調査区域より１段高い区画（現状は個人住宅）が存在し、この部分に寺院跡の主要な遺構が存在している可能性が高いことなどから、広義の集落跡「妙福寺遺跡」として扱うこととした。

発掘調査終了後、当初は現地作業のみとしていた契約を平成27年６月19日付けで変更契約を締結して、整理作業の一部を行った。報告書作成作業及び収蔵作業は平成28年４月21日付けで契約を締結して実施した。

本書は、以上のような経緯を経て実施した発掘調査の成果をまとめたものである。当地の文化財資料として、また文化・歴史探究の一助として広く活用していただければ幸いである。

事業者である株式会社明成から発掘調査・整理作業・報告書作成作業の便宜を図っていただいた。また、発掘調査にあたって、土地の所有者や地域の方々の多大なご協力を得た。末筆ながら記して心から感謝の意を表したい。

Ⅱ　位　置　と　環　境

妙福寺遺跡は、広島県東広島市八本松飯田七丁目に所在する集落跡である。遺跡の所在する東広島市は、広島県の中央部南側に位置しており、市域の西部を広島市に接する人口約18万人の都市である。市内は、市域の中央には標高約200mの西条盆地が広がり、その北西に位置する志和盆地、北東に位置する白市盆地などの小盆地と周囲の標高400～600m級の山々から構成されている。本遺跡は、その西条盆地の西端、深堂山（標高597.8m）の南麓に位置し、標高は約250mである。深堂山から流れる深堂川が東南流する清滝川とともに黒瀬川に注ぎ、蛇行しながら南流する。

当地域は古代から交通の要衝にあたり、遺跡の南西には古代から近世山陽道の峠と推定されている大山峠があり、瀬野川流域とつながっている。また、遺跡の北西には志和盆地を抜けて太田川水系の三篠川流域とつながる今坂峠があり、西条盆地の西の出入り口を構成している。

以下では、本遺跡周辺の遺跡の様相について概観する。

【縄文時代】　この時代の遺跡は現在のところ確認されていない。

【弥生時代】　この時代の遺跡としては、5基の土坑墓からなる墳墓群である藤が迫墳墓群(1)がある。土坑墓内部に小口板を立てたものや、地上標識として石を置いたものなどが確認されている。副葬品として出土した安山岩の打製石鏃から、遺構の年代は少なくとも中期後半から終末期のものと考えられている。また、住居跡としては、中期の竪穴住居跡が検出された磯松池遺跡(2)や後期前半の円形住居跡3軒が検出された徳政遺跡(3)などがある。

【古墳時代】　この時代の遺構としては、まず古墳が多く確認されており、前期では竪穴式石室をもつ藤が迫古墳群(4)の第1号古墳があるほか、埴輪が出土する正力の城福寺山古墳(5)などがある。中期では、箱式石棺をもつ碇神社裏古墳(6)がある。後期では、横穴式石室をもつ光堂寺古墳群(7)、杓子谷古墳(8)、煎汁が城古墳(9)、向原古墳群(10)、飢坂古墳群(11)などがある。また、住居跡としては、中期後半ごろの隅丸方形住居跡1軒と方形住居跡3軒が徳政遺跡(3)で検出されている。このほかに遺構ではないが、磯松池周辺からは須恵器が採集されており、槇の前遺跡(12)からは須恵器坏が、宗吉の長尾遺跡(13)でも須恵器高坏が出土している。

【古代】　この時代の遺跡としては、古代と中世をまたぐ平安時代末ないし鎌倉時代初期ごろの旦原窯跡(14)があり、小皿・椀（埦）・鉢などの須恵器が出土している。そのほかの遺跡は確認されていないが、藤が迫古墳群(4)では石帯に付属する大理石製の巡方が出土しており、また、徳政遺跡(3)でも奈良時代の平瓦が出土していることから、奈良時代以降も継続して人々が暮らしていたことが分かる。また、清滝経塚(15)では須恵器や土師質土器が出土したと伝えられている。

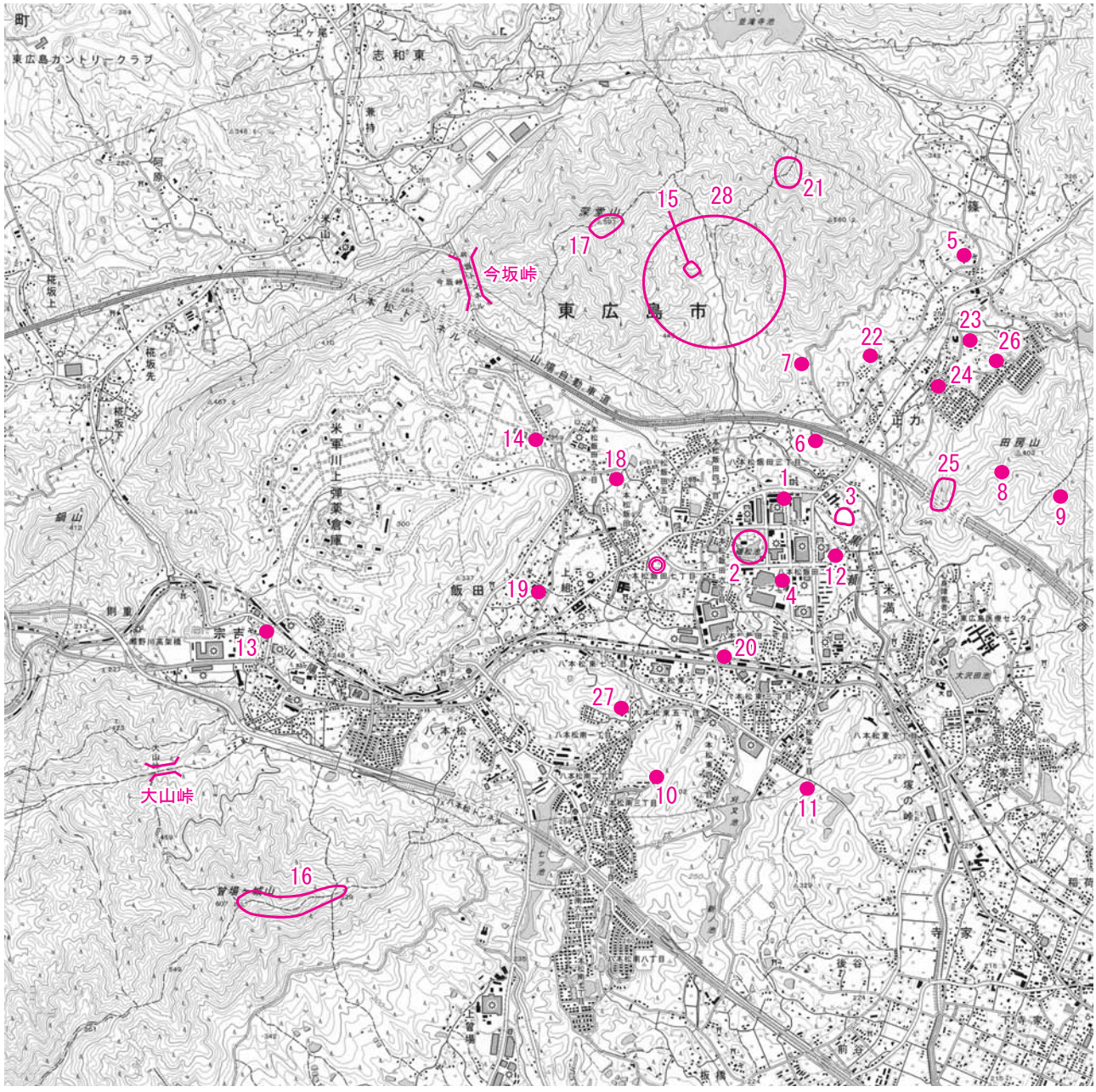
【中世】　この時代の遺跡としては、山城が多く確認されている。本遺跡周辺で主なものとしては、大内氏の安芸国内での拠点であったと考えられている曽場ヶ城跡（別名杣城

跡）[16]、財満氏の居城であったと考えられている清滝城跡[17]（別名茶臼山城）がある。そのほか、方形城館跡や土居屋敷跡も多く確認されている。主なものとしては、掘立柱建物跡や土坑跡・溝跡・堀跡の一部などが検出された15世紀後半から16世紀頃の屋敷跡もしくは城館跡とされる城仏土居屋敷跡[18]や、周囲をめぐる大規模な堀跡・土橋・桝形状遺構・井戸・門跡などが検出された16世紀前半から中頃の平地城館跡である土居遺跡[19]、土塁が検出された土居の内館遺跡[20]がある。そのほか、本遺跡周辺には南条城跡[21]、藤が迫城跡[22]、古屋城跡[23]、熊谷城跡[24]、煎汁が城跡[25]などがある。また、岩の前遺跡[26]では梵字と碑文のある供養碑に類すると考えられる室町時代末期から安土桃山時代のものと推定される石造物が確認されている。

さらに、遺跡名称の由来となった妙福寺[27]は、南北朝時代（光厳天皇時代）に開基され、本遺跡に所在していたと考えられている。また、かつて深堂山の南麓に存在していた清滝十二坊[28]の一つであるとされている。当時の妙福寺には寺屋敷の前に小さな祠があり、持明院第６皇子（光厳天皇の御子か）の使用した冠と紐が祀られていたという。しかしその後、数回の繁栄と衰退を繰り返した。やがて17世紀初頭に浅野氏が広島藩主となり、その家臣の大橋市郎左衛門が原飯田村（現八本松飯田）に領地を与えられ来村した。その際に妙福寺のことを聞き、自分が熱心な法華信者であったこともあって、藩に許可を得て山を拓き、現在地（現八本松南一丁目）へ再建して今日に至っている。

註

（１）「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告」『広島県文化財調査報告』第９集 広島県教育委員会1971
（２）『磯松池遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会2008
（３）『徳政遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会1982
（４）（１）と同じ
（５）広島県川上村史編纂会『広島県川上村史』川上村史刊行会1960
（６）広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅱ』1994
（７）（５）と同じ
（８）（６）と同じ
（９）（５）と同じ
（10）（６）と同じ
（11）（５）と同じ
（12）（６）と同じ
（13）（５）と同じ
（14）「旦原窯跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会1983
（15）（５）と同じ
（16）『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第２集　広島県教育委員会1994
（17）（16）と同じ
（18）『城仏土居遺跡』財団法人東広島市教育文化振興事業団2005
（19）『土居遺跡発掘調査報告書』財団法人東広島市教育文化振興事業団2001
（20）「土居の内館跡」『埋蔵文化財調査報告』東広島市教育委員会1993
（21）（16）と同じ
（22）（16）と同じ
（23）（16）と同じ
（24）（16）と同じ
（25）（16）と同じ
（26）松村昌彦・伊藤健司編「岩ノ前遺跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会1983
（27）広島県川上村史編纂会『広島県川上村史』川上村史刊行会1960
　　飯田米秋『賀茂郡史－中世武士編－』東広島ジャーナル1984
　　『東広島の歴史事典』東広島郷土史研究会1997
（28）（27）と同じ



◎ **妙福寺遺跡**
1．藤が迫墳墓群　2．磯松池遺跡　3．徳政遺跡　4．藤が迫古墳群
5．城福寺山古墳　6．碇神社裏古墳　7．光堂寺古墳群　8．杓子谷古墳　9．煎汁が城古墳
10．向原古墳　11．飢坂古墳群　12．槇の前遺跡　13．長尾遺跡　14．旦原窯跡
15．清滝経塚　16．曽場ヶ城跡　17．清滝城跡　18．城仏土居屋敷跡　19．土居遺跡
20．土居の内館遺跡　21．南条城跡　22．藤が迫城跡　23．古屋城跡　24．熊谷城跡
25．煎汁が城跡　26．岩の前遺跡　27．妙福寺　28．清滝十二坊

第１図　周辺遺跡分布図（1:40,000）

平成21(2009)年発行の国土地理院発行地形図「安芸西条」 1:25,000を縮小し、加筆

Ⅲ　調　査　の　概　要

発掘作業の概要

発掘調査は、試掘調査によって得られたデータ（遺構面までの深さ、堆積土・遺物包含層の状況、遺物の出土状況など）を基に、重機を使用して表土を掘削し、遺構検出面を人力で精査して行った。

調査区は便宜上、１ ～ ４区に分けて実施した。

北側の１区は、調査区の東側で、表土直下で明褐色～黄橙色土の礫を多く含む地山層が露出した。この地山面を遺構検出面として精査した。

２区は、調査区の北側は１区と同様に表土直下で地山層が露出し、ピットなどの遺構を検出したが、調査区中央部から南側は、著しく削平されているという状況であった。何度も大きく掘削され、礫を多く含む地山層が露出し、遺構もほとんど遺存していなかった。堆積した土層を観察すると、耕作土と埋戻し土が重なっており、田畑の拡張が繰り返された様子が伺えた。

２区と３区の境目には、溝状遺構が切りあっていた。これらも畦畔下の溝跡と考えられるが、遺存状態が悪いため詳細は不明である。

３・４区は、試掘調査のデータ同様に表土直下で黄橙色粘質土層が検出されたため、これを遺構検出面として精査した。ピットが多数検出され、掘立柱建物跡が確認されたほか、道路状遺構が検出された。

検出された遺構は、掘立柱建物跡１棟、井戸１基、道路状遺構１条、土坑８基、性格不明遺構８基、ピット約130基（掘立柱建物跡の柱穴含む）である。

遺物は、土師質土器・陶磁器（輸入及び国産）・木製品（木質部が遺存していない漆碗）・金属製品などがコンテナ（340 ㎜×540 ㎜×150㎜） ５箱分出土した。そのほとんどは図示し得ないほどの小破片である。

整理作業の概要

出土した遺物は、水洗と注記作業を実施し、接合と復元作業、実測・写真撮影などの記録を行った。整理作業及び報告書作成作業を進めながら、保管のための分類・収蔵作業も実施した。

調査体制

平成27・28年度

東広島市教育委員会

教育長：下川聖二（～平成28年６月３日）、津森 毅（平成28年７月１日～）

生涯学習部長：大河 淳（～平成28年３月31日）、天神山勝浩（平成28年４月１日～）

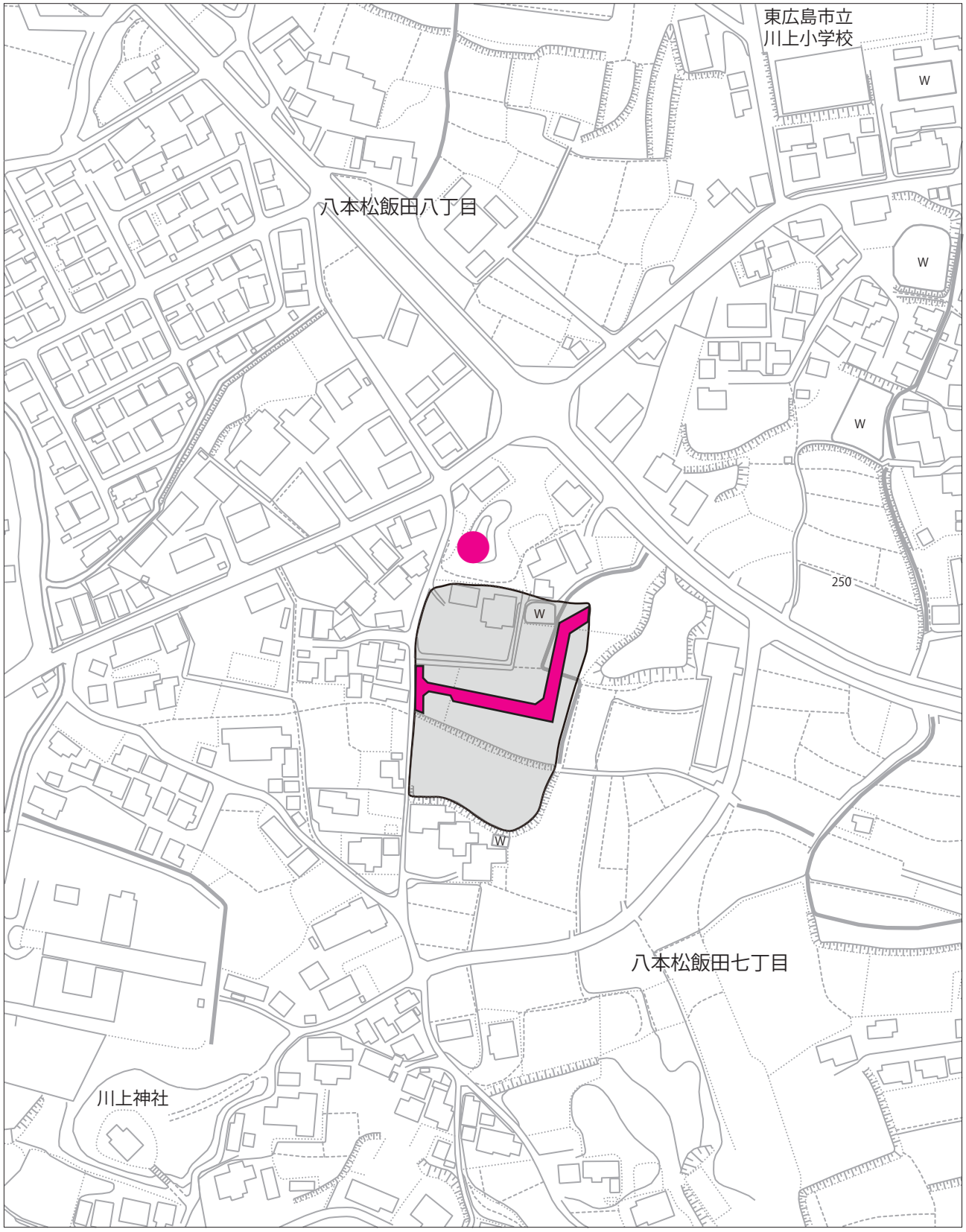
生涯学習部次長兼文化課長：藤岡孝司（～平成28年３月31日）、

文化課長：福光直美（平成28年４月１日～）

参事兼出土文化財管理センター所長兼調査係長：妹尾周三

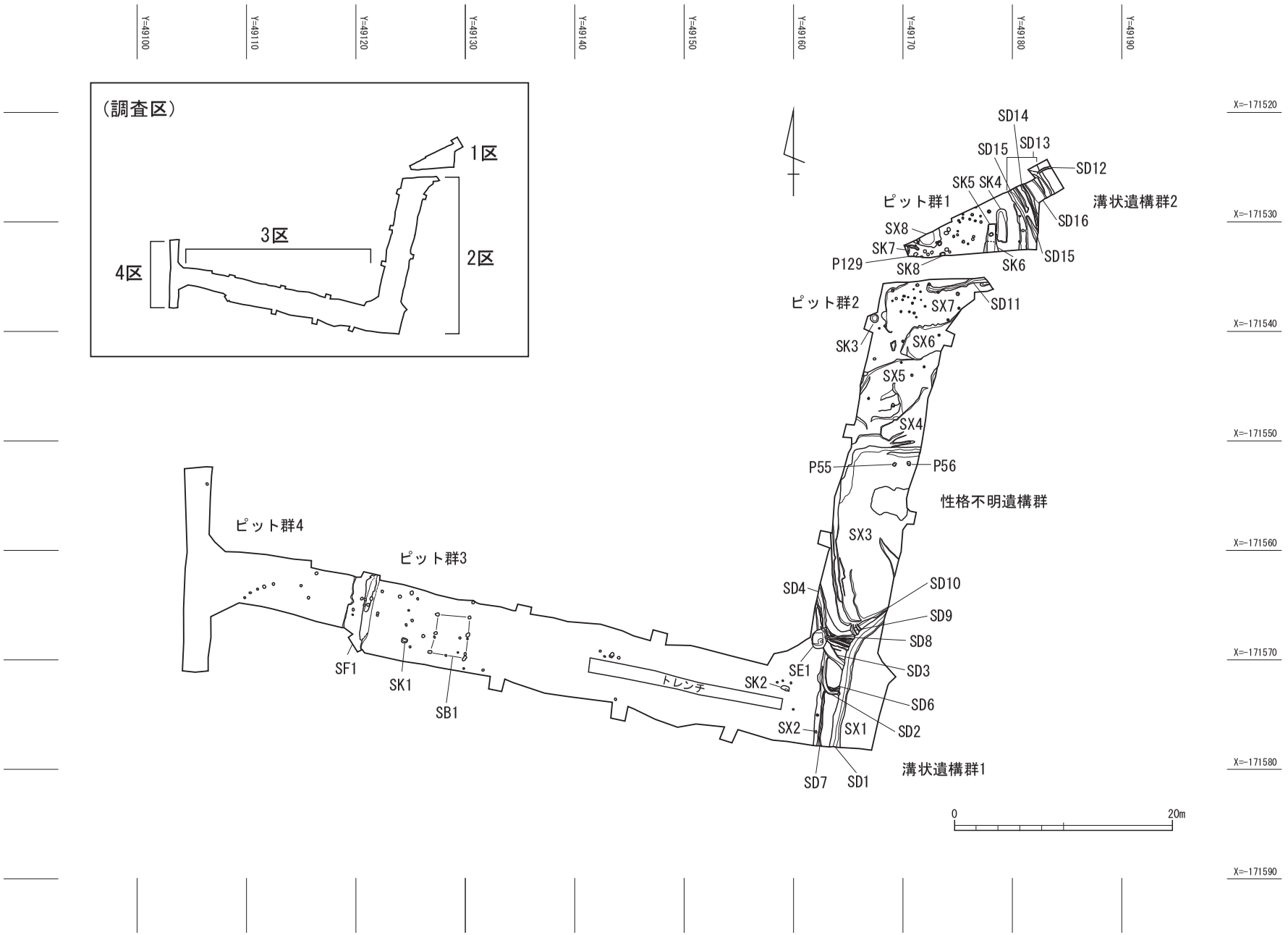
調　査　調査係主査：石垣敏之、埋蔵文化財調査員：吉田由弥・日浦裕子

事　務　調査係主査：萩原真史、事務職員：片山由紀子



■は妙福寺遺跡の範囲、■は今回の調査範囲、●は妙福寺古墓

第2図　妙福寺遺跡周辺地形図（1:2,500）



第3図　妙福寺跡遺構配置図(1:500)

Ⅳ 遺 構 と 遺 物

SB１（第４図、図版４）

３区の西半部で検出した、柱間１間×２間（約3.2m×3.7m）の掘立柱建物跡である。柱穴の規模は、直径0.2m～0.45m、深さ0.2m～0.45mを測る。桁間は（北側から）、東側が1.5m－2.2m、西側が1.7m－1.8mを測る。梁間は、北側が2.9m、南側が中央に小ピットがあり、（東側から）1.8m-1.4mである。

桁間中央の柱穴の傍及び南側の梁間の中央に小ピットが存在するが、これらが建物跡に関連するものかは不明である。

SE１（第５図、図版２）

２区と３区の接する部分で検出された平面形が不整な楕円形を呈する土坑（井戸）である。規模は、長軸約1.8m、短軸約1.4m、深さ約1.6mを測る。底面の形状は、約１m×１mのほぼ方形を呈しており、方形を意識して掘り下げられたものと考えられる。

堆積土の断面観察では、下層に灰黄褐色の粘土が堆積しており、滞水していた可能性を示す。一方、中位までは人頭大の礫を含んだ粘質土で埋められ、中位から上層は斜めの堆積状況がみられる。また、壁面で確認された厚さ４～10cm程度の褐色粘質土は、貯めた水が浸み出さないために塗られたものであろうか。

東側に接する溝状遺構SD８は、井戸と水路として同時期に機能していたものと考えられる。

出土遺物（第13図１、図版５）

１は、輸入陶磁器の龍泉窯系青磁碗の小破片である。口縁下部に僅かに雷文帯が確認できる。

SF１（第６図、図版３）

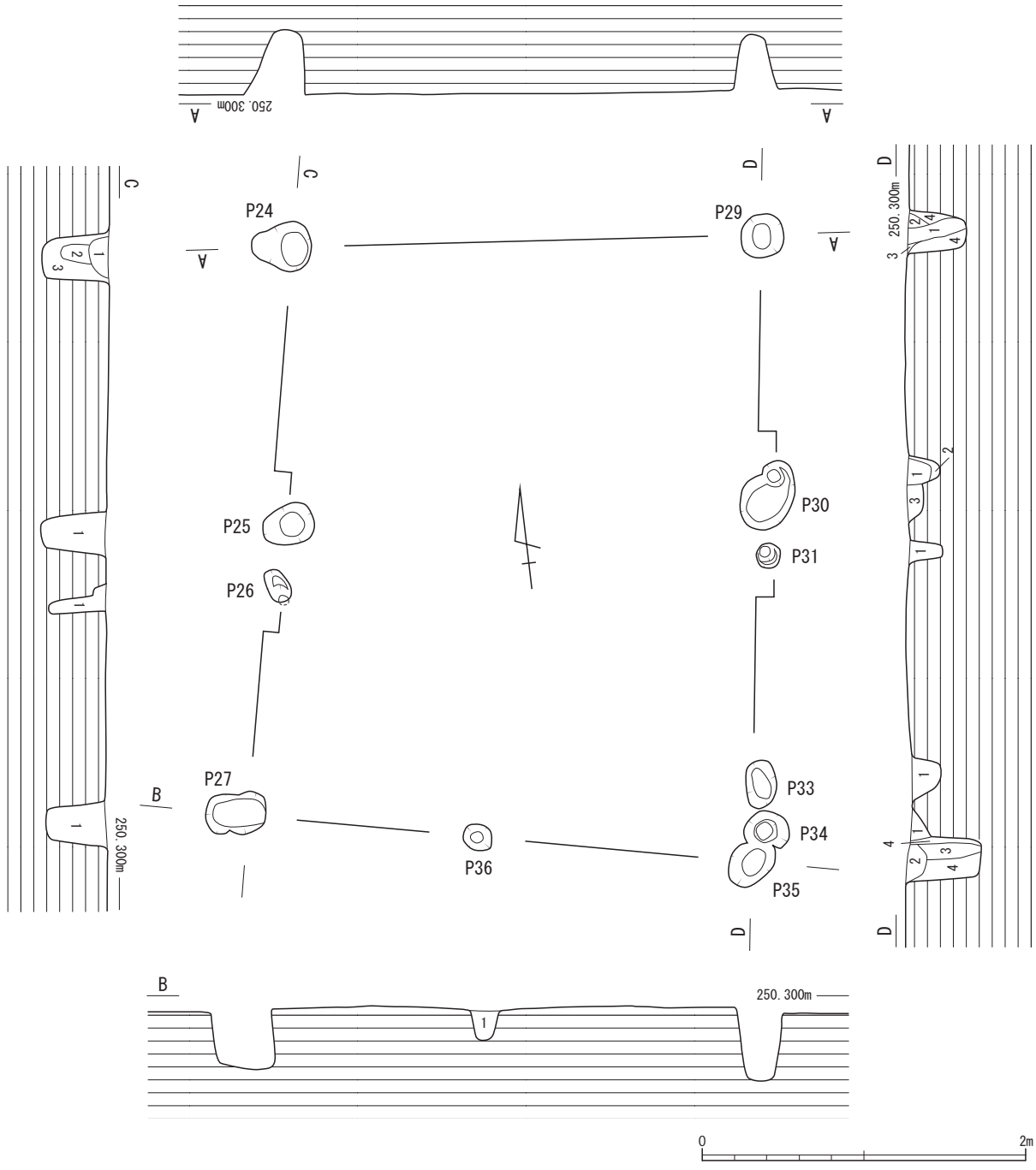
３区の西半部で検出された、断面がカマボコ状を呈する南北方向の道路状遺構である。

表土直下で平坦部分が検出され、側溝や硬化面など道路に関する遺構は確認されなかったため、著しく削平されたと考えられる。

なお、調査前は、この道路状遺構の両側に切石が並べられ、調査区北側の個人住宅の正面玄関へと続く道であった。この石列（道）の両側は、水田として使用されており、田畑を作る際に掘削した結果として、道路部分が断面カマボコ状に残されたものと考えられる。

SK１（第７図）

３区の西半部で検出された、平面形が不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.55m、短軸約0.45m、深さ約0.1mを測る。



P24土層説明
1　灰黄褐色粘質土
2　にぶい黄褐色粘質土
3　褐色（強）粘質土

P25土層説明
1　にぶい黄褐色粘質土

P26土層説明
1　暗褐色土

P27土層説明
1　褐色粘質土と暗褐色粘質土の混じった土

P29土層説明
1　にぶい黄褐色砂質土
2　灰黄褐色砂質土
3　灰黄褐色砂質土
4　にぶい黄褐色粘質土

P30土層説明
1　暗褐色砂質土
2　暗褐色砂質土
3　灰黄褐色粘質土

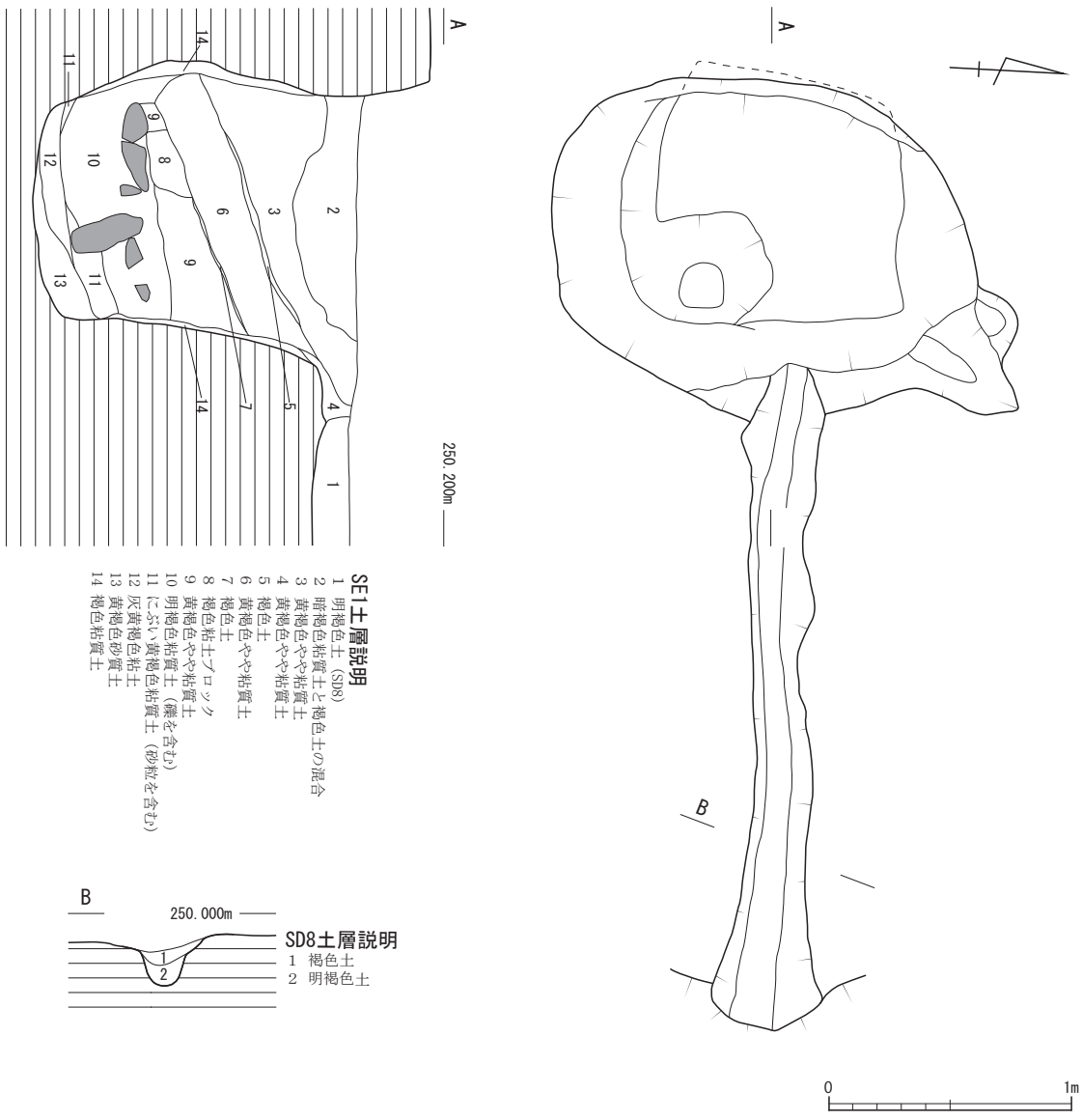
P31土層説明
1　暗褐色土

P33土層説明
1　にぶい黄褐色粘質土

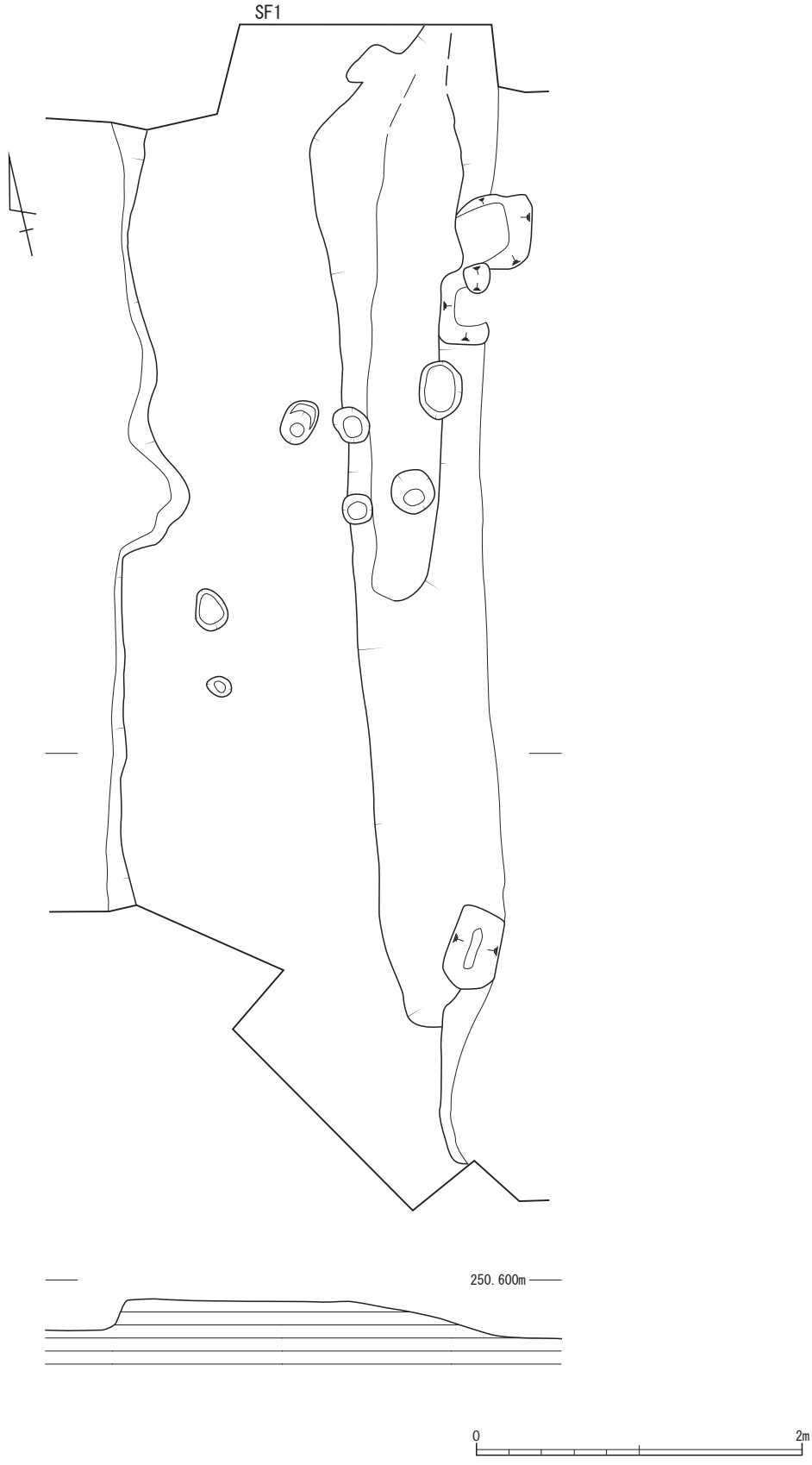
P34・35土層説明
1　灰黄褐色砂質土
2　にぶい黄褐色砂質土
3　灰黄褐色粘質土
4　灰黄褐色粘質土

P36土層説明
1　褐色土

第4図　SB1実測図(1:40)



第5図　SE1、SD8実測図(1:30)



第6図　SF1実測図(1:40)

SK２（第７図、図版４）

３区の東側で検出された、平面形が不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約0.8m、短軸約0.4m、深さ約0.2mを測る。底部及び断面が不整形で、植物の根などの痕跡の可能性もある。

SK３（第７図、図版３）

２区の北端部で検出された、平面形が円形を呈する土坑である。規模は、直径約0.75m、深さ約0.4mを測る。

SK４（第７図、図版１）

１区のほぼ中央で検出された、平面形が不整な楕円形を呈する土坑である。規模は、長軸約3.1m、短軸約１m、深さ約0.05mを測る。土層断面の観察によって、西側で接するSK５を僅かに切っていることが確認できた。
出土遺物は、すり鉢など土師質土器の破片であり、詳細は不明である。

SK５・６（第８図、図版１）

１区のほぼ中央で検出された、土坑である。検出時は1つの土坑として認識していたが、土層断面と焼石及び焼土・炭化物の検出状況から、平面形が隅丸長方形を呈するSK５の南側を、長楕円形を呈するSK６によって壊されたものと考えられる。検出した長軸約2.6m、短軸0.７～1.3m、深さ0.３～0.4mを測る。

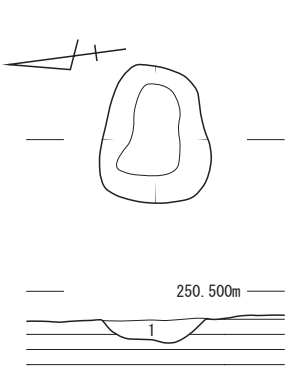
東側はSK４に接し、完掘後の底面からピット１基（P130）が検出された。SK５・６は、P130より新しく、SK４より古い遺構（P130⇒SK５⇒SK４・SK６）と考えられる。
SK５は、土坑の中心部から、拳大～人頭大の焼けた石が多数検出された。規則性は無く、無造作に置かれたものと推測される。また、土坑の北側には焼土及び炭化物がまとまって検出されている。

本遺跡が寺院跡の伝承地であり、そこから火を使った痕跡が認められれば火葬墓の存在を推測しがちであるが、SK５は、土坑の周囲は赤く変色することも硬化することもなく、埋土から骨片等も確認できなかったため、いわゆる「火葬土坑（墓）」と断定することは難しい。この遺構の上部に火葬施設が存在していた可能性もあるが、２次的に被熱したと考えられる壁土が出土しており、火災処理土坑など「墓」とは全く異なる施設も想定しなければならないであろう。

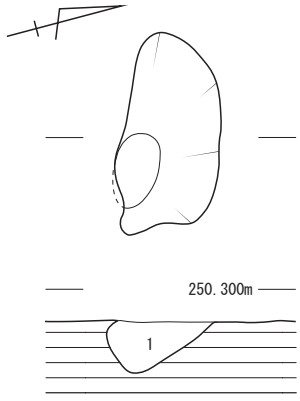
SK６は、SK５を壊して構築されており、炭化物を微量含んでいたが焼石と焼土は含まない。

出土遺物（第13図２、図版５）

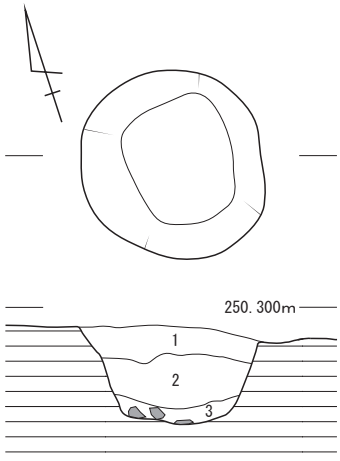
２は、土師質土器の鉢である。小破片であり、風化が著しいため詳細は不明であるが、内面にクシメが僅かに観察できるため、すり鉢と考えられる。粘土貼付けによる取っ手が残存する。



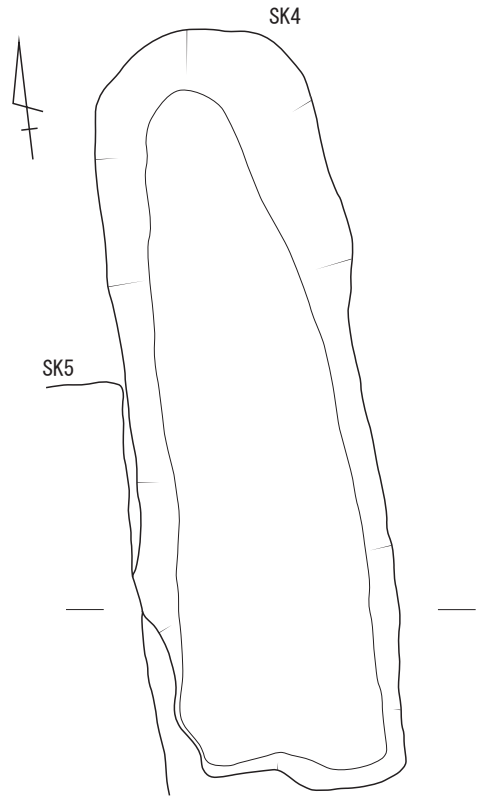
SK1土層説明
1　黄褐色粘質土

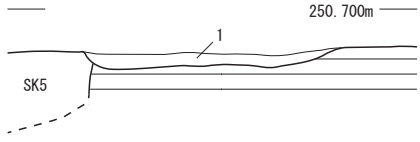


SK2土層説明
1　暗褐色粘質土

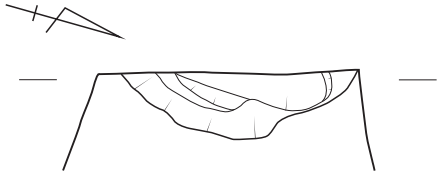


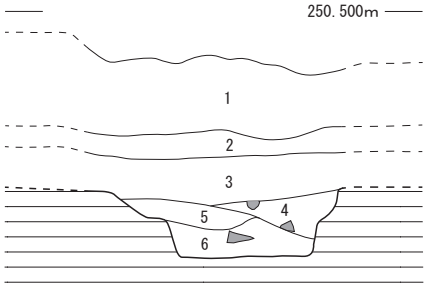
SK3土層説明
1　褐色砂質土
2　にぶい黄褐色砂質土
3　にぶい黄褐色粘質土



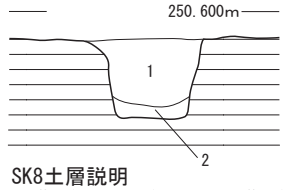


SK4土層説明
1　褐色粘質土

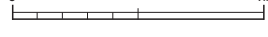




SK7土層説明
1　にぶい黄褐色土
2　黄褐色土
3　にぶい黄褐色砂質土
4　にぶい黄褐色土（礫を含む）
5　暗褐色粘質土（炭化物を含む）
6　にぶい黄褐色粘質土（礫を含む）
※1～3は表土



SK8土層説明
1　黄褐色土と暗暗色土とにぶい黄褐色土と浅黄橙色土の混合
2　にぶい黄褐色粘質土（砂礫含む）



第7図　SK1 ～ 4・7・8実測図(1:30)

SK７（第７図、図版１）

１区の西端で検出された、平面形が円形を呈する土坑である。規模は、直径約0.9m、深さ約0.25mを測る。

出土遺物は、土師質土器の破片であり、詳細は不明である。

SK８（第７図、図版１）

１区の南側で検出された、平面形が不整な隅丸方形を呈する土坑である。規模は、東西約0.5m、深さ約0.3mを測る。

SX１～７（第３・９・10図、図版２）

２区で検出された、平面形が不整な性格不明遺構群である。

遺跡の東側を､何度も大きく抉るように構築されている。調査区の壁面を観察すると、黒褐色土と黄褐色土が相互に数度堆積しており、耕作土と埋め立て土の繰り返しが行われたと考えられる。これら性格不明土坑群（SX１～７）は、耕作地を確保するため、拡大していった痕跡と考えられる。

出土遺物（第13図10～14、図版５）

今回の発掘調査で出土した遺物の多くは、この性格不明土坑群（SX１～７）から出土したものである。また、SX３の底面から、漆器の被膜だけが検出されたが、遺存状態が非常に悪いため、詳細は不明である。

10～13はSX１から、14はSX７から出土した。10は、土師質土器の鍋である。口縁部直下につまみ出しによって断面三角形を呈する鍔を作り出している。11・12は、肥前系陶器の皿である。11は見込みに砂目痕が残り、外面下半部は無釉である。12は見込みと高台に砂目痕が残り、高台内は無釉で赤褐色を呈する。13は、肥前系磁器の碗である。やや高い高台を有し、内面は無釉で深く削る。14は、輸入陶磁器の龍泉窯系青磁碗である。小破片であるが、口縁下部に蓮弁文の一部が確認できる。

SX８（第12図、図版１）

１区の北西部で検出された、平面形が不整な円形を呈する性格不明土坑である。規模は、直軸約2.4m、短軸1.4m、深さ約0.2mを測る。

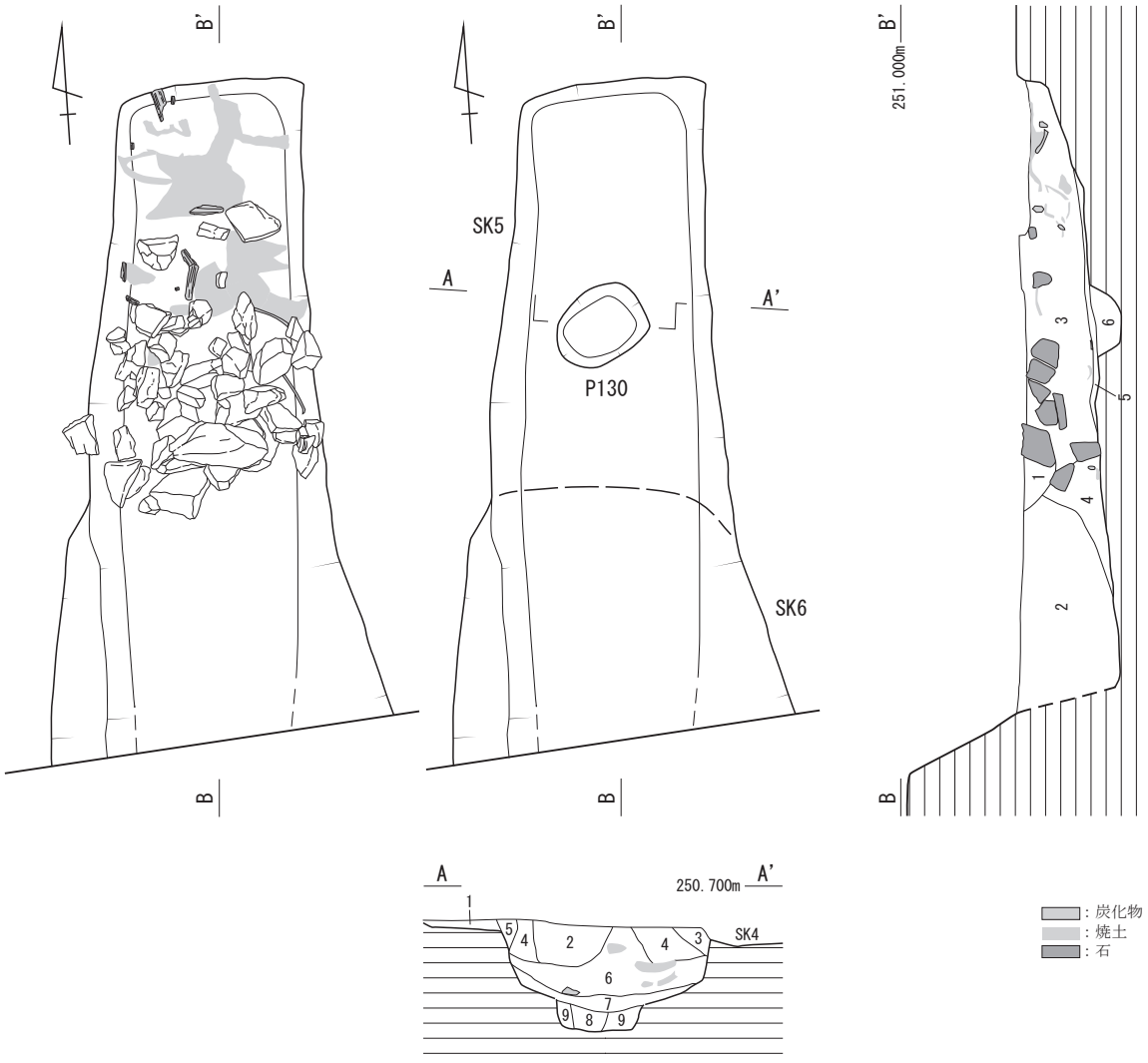
出土遺物は、土師質土器と土壁の破片であり、詳細は不明である。

ピット群１（第３図、図版１）

１区の西半部で検出された､ピットが30基以上集中する地区である。ピットの規模は、直径0.15～0.45m、深さ0.06～0.22mを測り、やや浅めのピットが多い。調査区が限られることもあり、建物跡などの規則性は確認できなかった。

出土遺物（第13図15、図版５）

15は、１区P129から出土した土師質土器の皿である。



SK5、P130土層説明(A-A')

(SK5)	1	にぶい黄褐色土(炭化物微量に含む)
	2	暗褐色土と黄褐色土の混合土
	3	暗褐色粘質土と褐色土の混合土
	4	暗褐色粘質土(炭化物微量に含む)
	5	暗褐色粘質土
	6	にぶい黄褐色土粘質土(焼土・炭化物含む)
	7	にぶい黄褐色粘土
(P130)	8	暗褐色粘質土
	9	黄褐色砂質土

SK5・6、P130土層説明(B-B')

	1	にぶい黄褐色土(炭化物含む)
(SK6)	2	黄褐色砂質土
(SK5)	3	にぶい黄褐色土粘質土(焼土・炭化物含む)
	4	にぶい黄褐色粘質土(炭化物含む)
	5	にぶい黄褐色粘土
(P130)	6	黄褐色砂質土

0 1m

第8図　SK5・6、P130実測図(1:30)

ピット群２（第３図、図版２）

２区の北半部で検出された、ピットが30基以上集中する地区である。ピットの規模は、直径0.１～0.3m、深さ0.03～0.35mを測り、やや小さめのピットが多い。調査区が限られることもあり、建物跡などの規則性は確認できなかった。

ピット群３（第３図、図版３）

３区の西半部で検出された、掘立柱建物跡SB１を含むピットが集中する地区である。ピットの規模は、直径0.15～0.4m、深さ0.06～0.3mを測る。道路状遺構SF１からSB１までの区域に集中している。限られた調査区ではあるが、SB１の東側から２区溝状遺構群までは数基のピットを除いて遺構が存在しない地区が広がる。

ピット群４（第３図、図版４）

４区で検出された、ピットが集中する地区である。ピットの規模は、直径0.２～0.3m、深さ0.１～0.4mを測る。調査区が限られることもあり、建物跡などの規則性は確認できなかった。

ピットNo.55・56（第３図）

２区のほぼ中央部、で検出されたピット２基である。規模は、直径0.３～0.4m、深さ約0.6mを測る。他のピットに比べてかなり深いが、調査区内では２基しか検出できなかったため、建物跡などの規則性は確認できなかった。

溝状遺構群１（SD１～SD10）

２区南端部から溝状遺構が集中して検出された。SX１～３との位置関係や、土層断面（第10図）の観察などから、SD１～３・７・９・10は、旧耕作地に関係する水路と考えられる。

SD１（第９図、図版３）

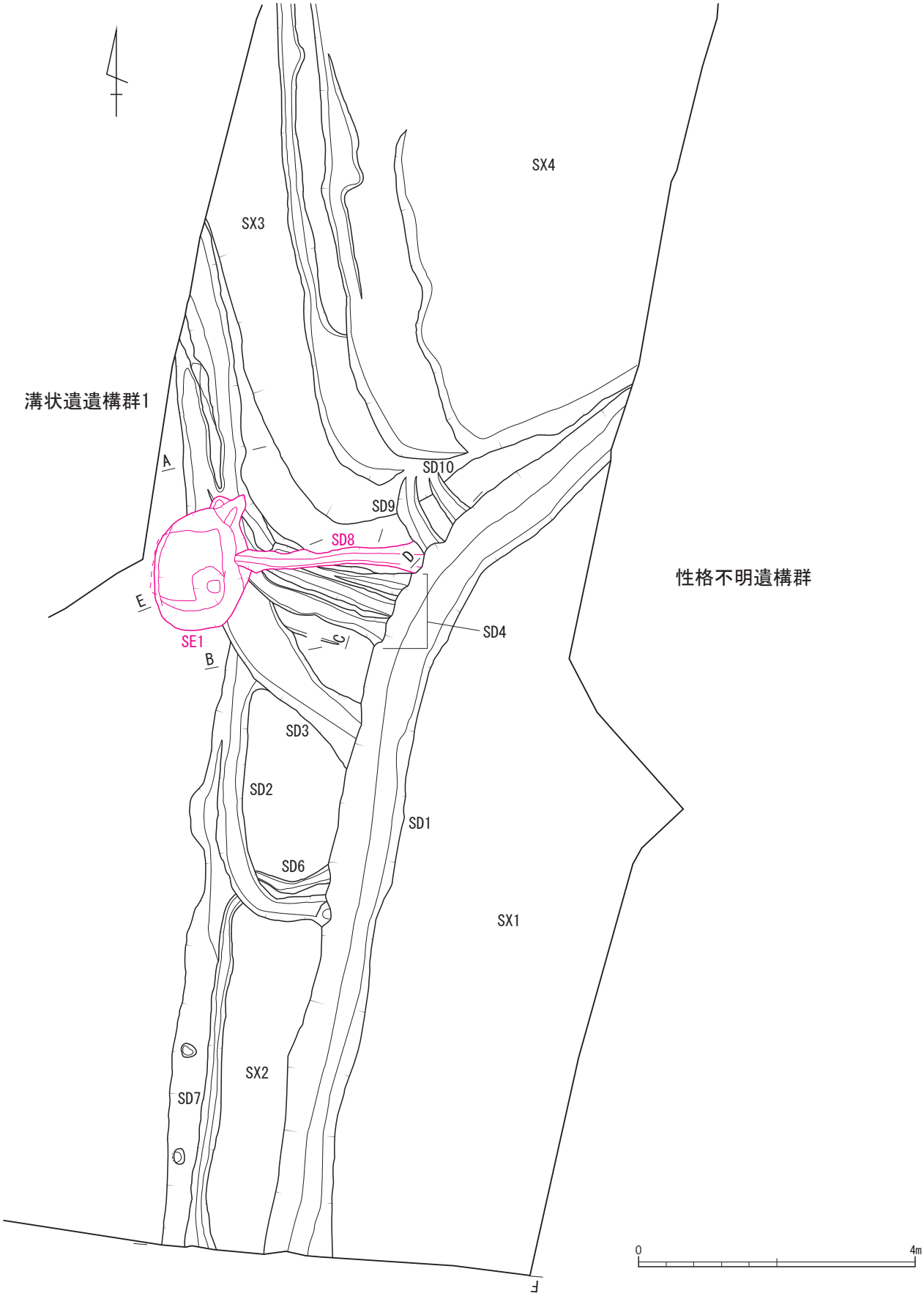
SX１の周囲を巡り、調査区外へと延びる溝状遺構である。幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。旧耕作地の畔下の水路と考えられる。

SD２（第９図、図版３）

SX２の平坦面に所在し、L字状に屈曲した溝状遺構である。調査区外へと延びている。幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。

出土遺物（第13図３、図版５）

３は、土師質土器のすり鉢である。土師質土器のすり鉢で、内面に２条１単位とするクシメが確認できる。口唇部は、粘土貼付けによる上方への突出部を作り、口縁下部に断面三角の鍔条の張り出しに仕上げている。



第9図　SD1 ～ 4・6 ～ 10、SE1、SX1 ～ 3実測図(1:80)　※赤色は先行する遺構

SD３（第９図、図版３）

SX２の平坦面に所在する溝状遺構で、北側は調査区外へ延びる。規模は、幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。南東側はSX１によって壊され、SD２より新しく、SD４より古い。出土遺物は、土師質土器の破片であり、詳細は不明である。

SD４（第９図、図版３）

SX２の平坦面に所在する溝状遺構で、北側は調査区外へ延びる。規模は、幅約１m、深さ約０.08mを測る。検出時には確認できなかったが、２条以上の溝状遺構が重複したものと考えられる。南東側はSX１によって壊され、SD３より新しい。

出土遺物（第13図４、図版５）

４は、輸入陶磁器の白磁皿である。SD３と４が合流した場所から出土したため、出土地点の特定が困難であった。

SD５（第９図、図版３）

平面図には図示しなかったが、SD３・４に重複した近現代の溝である。表土とほぼ同じ灰色砂質土の溝で、暗渠排水と考えられる。

出土遺物（第13図５、図版５）

５は、肥前系磁器の瓶である。底部しか遺存しないが、仏花瓶と考えられる。

SD６（第９図、図版３）

SX２の平坦面に所在する溝状遺構である。規模は、幅約0.2m、深さ約0.02mを測る。SD２及びSX１によって壊されている。

SD７（第９図、図版３）

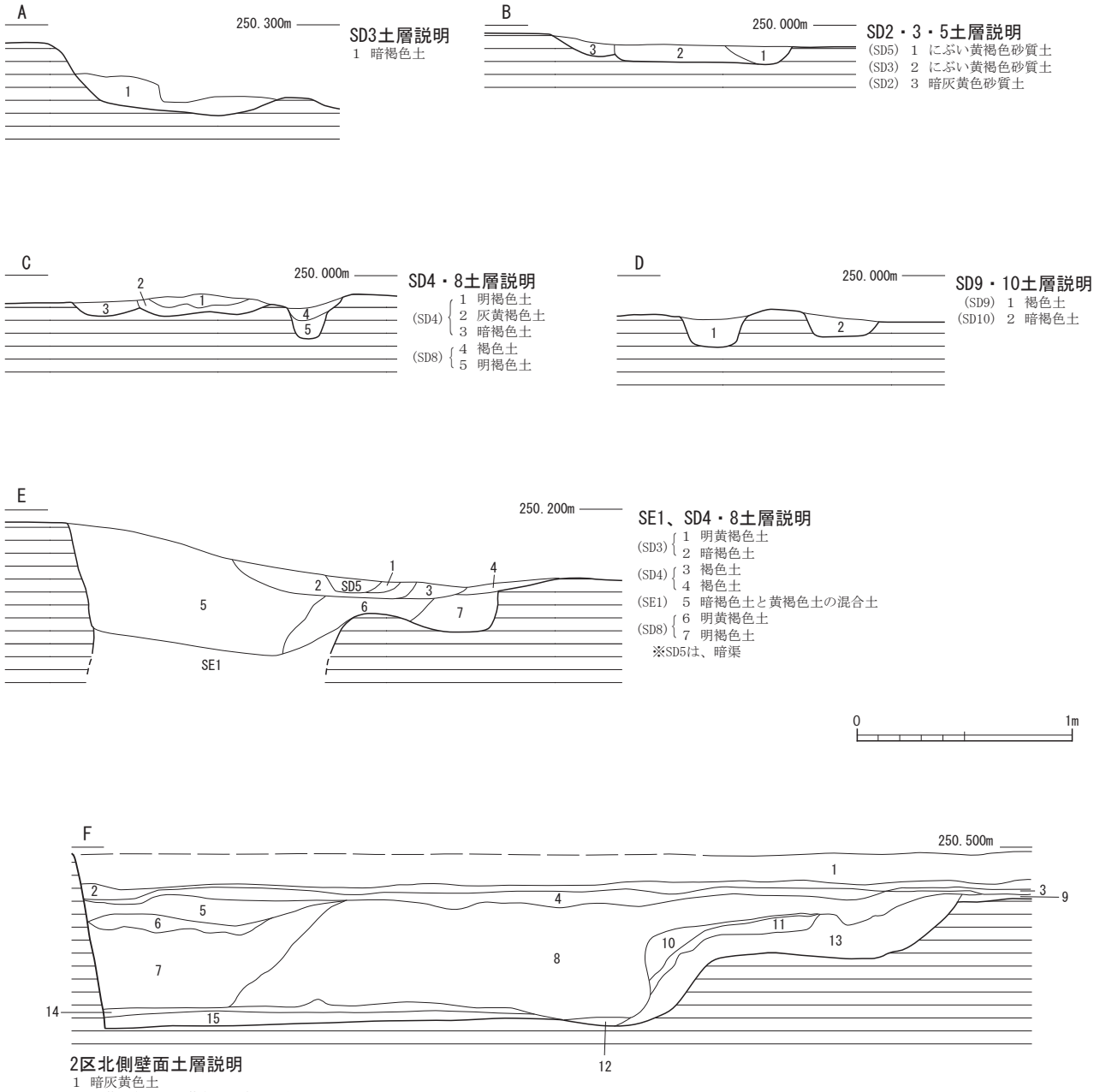
SX２の平坦面に所在する溝状遺構で、南側は調査区外へ延びる。規模は、幅約0.3m、深さ約0.05mを測る。旧耕作地の畔下の水路と考えられる。SD２より新しい。

SD８（第９図、図版３）

SX２の平坦面に所在する溝状遺構である。規模は、幅約0.2m、深さ約0.15mを測る。東側はSD９・SX１によって壊され、SD３～５より明らかに古いことから、SE１と同時期の遺構と考えられる。

SD９・10（第９図、図版３）

SX１とSX２の間に所在する溝状遺構である。規模は、幅約0.3m、深さ約0.1～0.15mを測る。SX３からSX１に水を流すための溝と考えられる。



第10図　SD2～5・8～10、SE1、2区南側壁面実測図(F-F'のみ1:40、他は1:30)

SD11（第３図）

２区の北端部で検出した溝状遺構で、東側は調査区外へ延びる。規模は、幅約0.4m、深さ0.03 ～ 0.05mを測る。

SD12（第11図、図版１）

１区の北端部で検出した溝状遺構で、東側は調査区外へ延びる。規模は、幅約０.15m、深さ0.05 ～ 0.07mを測る。SD13とほぼ同じ堆積土であり、同時期に廃棄された可能性が高い。

出土遺物は、土師質土器と土壁の破片であり、詳細は不明である。

溝状遺構群２（SD13 ～ SD16）

１区東半部で検出した南北方向の溝状遺構群である。北側及び南側は、調査区外へ延びている。検出時は、幅広な１条の溝状遺構と認識していたが、完掘後の平面や土層断面の観察から、４条（４回）の溝状遺構であると判断された。

この溝状遺構群２の東側から遺構がほぼ確認できないことから、「妙福寺遺跡」の東側を区画する溝であった可能性もある。

SD13（第11図、図版１・２）

最も広い溝状遺構である。最大幅3.9m、深さ約0.2mを測る。溝状遺構群２の中で最も新しい溝である。上下２層（第11図土層説明４・５）に分層でき、機能していた時期に若干のズレがある。

出土遺物（第13図６ ～ ９、図版５）

６ ～ ９は、土師質土器である。６は甕で、外面には沈線によって区画された中に菊花文のスタンプをおす。７ ～ ９は鍋である。何れも口縁部直下につまみ出しによる鍔を作り出している。８は「く」字状に外反させた頸部をもち、他の鍋より古い形態と考えられる。

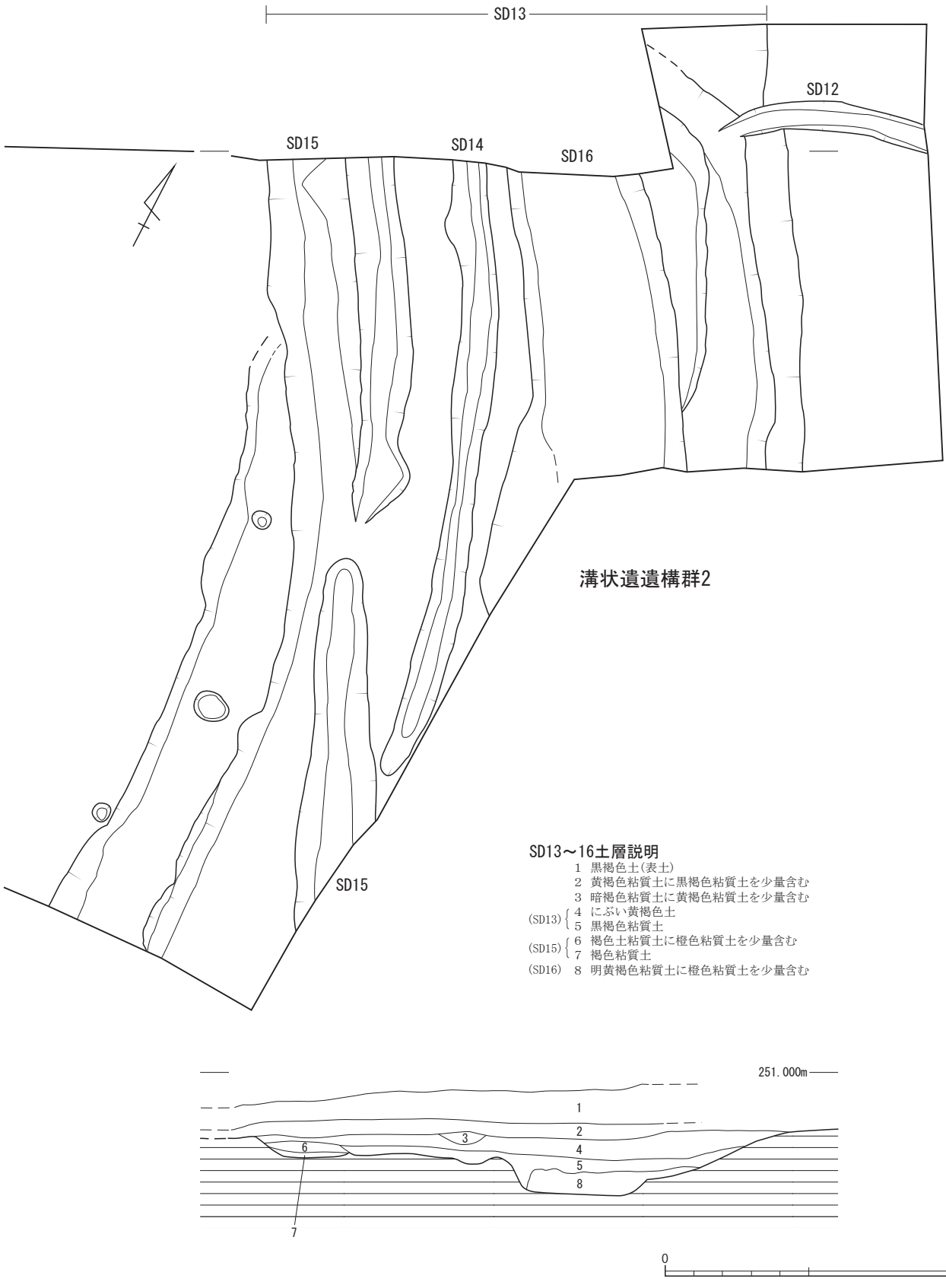
図示していないが、焼成粘土塊が出土している。スサ及び竹と考えられる痕跡が確認でき、土壁が２次的に被熱したものと推測される。

SD14（第11図、図版１・２）

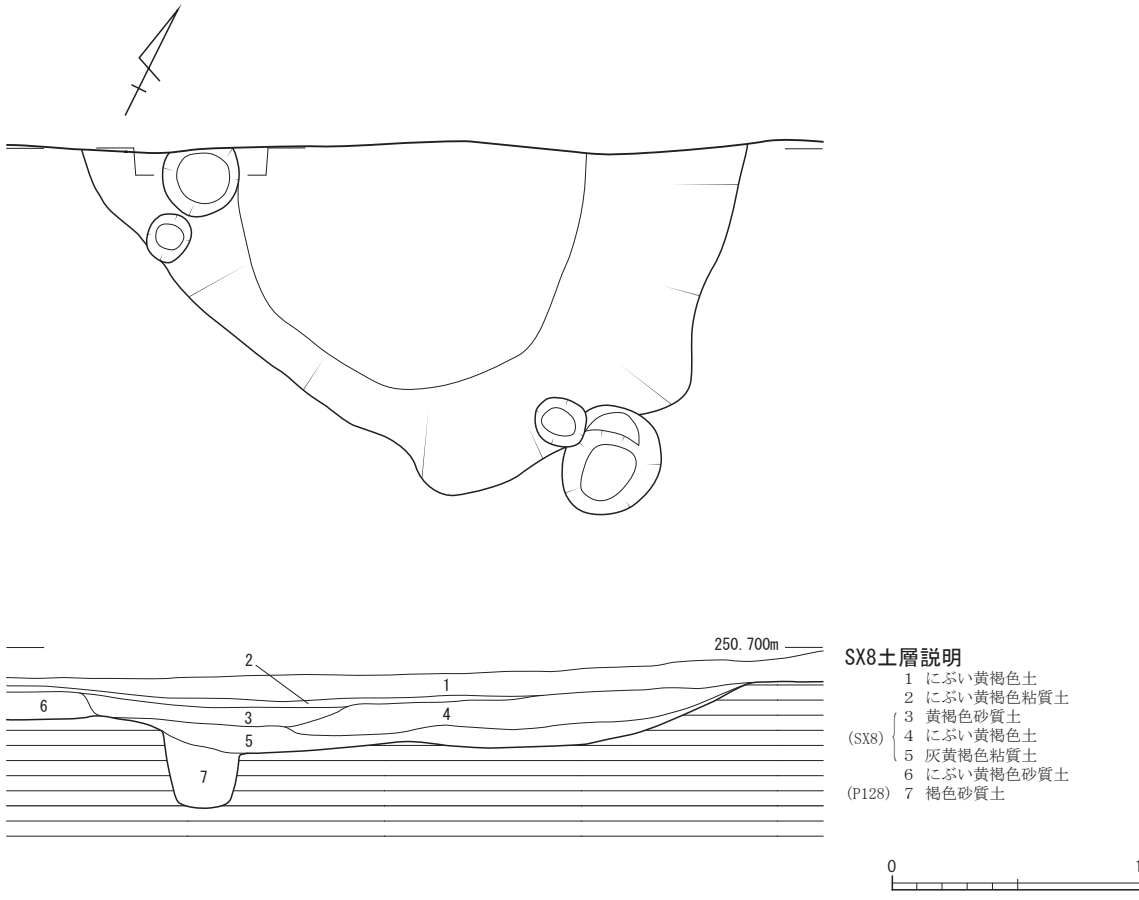
SD13を完掘した際、検出された溝状遺構である。最も細く、浅い。土層断面ではSD13の堆積土と同じものと判断されたが、平面プランにはっきりと残っているため別遺構として扱った。幅約0.25m、深さ約0.03mを測る。

SD15（第11図、図版１・２）

SD13を完掘した際、検出された溝状遺構である。土層断面の観察で、SD13によって壊されていることが確認できた。



第11図　SD12 ～ 16実測図(1:40)



第12図　SX8実測図(1:30)

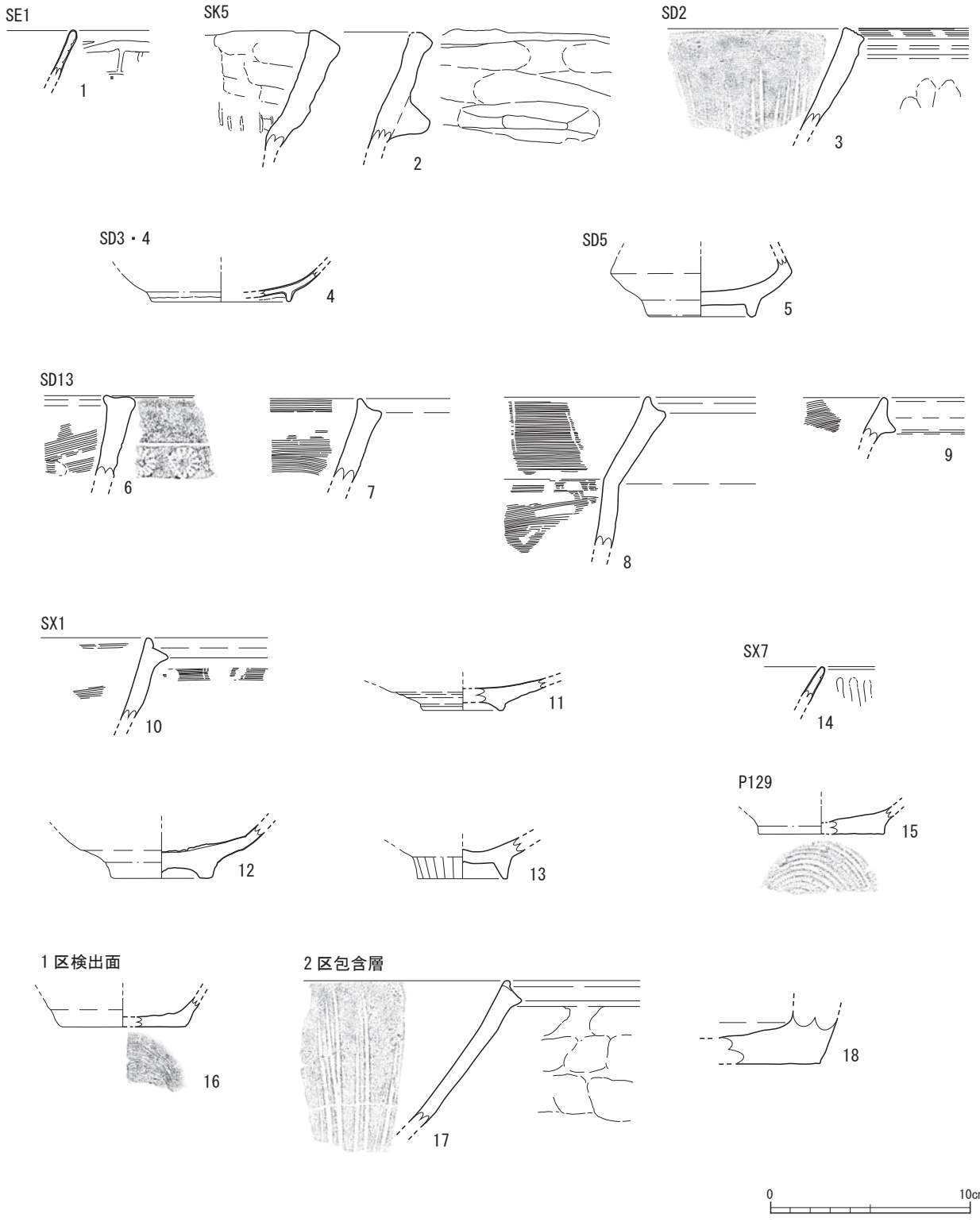
SD16（第11図、図版１・２）

最下層で検出した溝状遺構である。幅約１ｍ、深さ約0.2ｍを測る。溝状遺構群２の中で最も古い溝である。

出土遺物は、陶器と土師質土器の破片、土壁であり、詳細は不明である。

遺構外の出土遺物（第13図17～19、図版５）

16は、土師質土器の小皿である。17は、土師質土器のすり鉢で、内面に２条１単位とするクシメが確認できる。口唇部は、粘土貼付けによる上方への突出部を作り、口縁下部に断面三角の鍔条の張り出しに仕上げている。18は､備前焼の壺か甕と考えられるが、小破片のため詳細は不明である。



第13図　出土遺物実測図（1：3）

表1　妙福寺遺跡　遺物観察表

遺物番号	区	出土地点	種　別	器　種	法量（cm）（　）は復元値	胎　土	焼　成	色　　調	調　　整	備　　考
1	2区	SE1（下層）	青磁	椀	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：淡灰緑色 内面：淡灰緑色	外面：施釉、雷文帯か 内面：施釉	
2	1区	SK5	土師質土器	すり鉢か	口径：— 器高：— 底径：—	密	不良	外面：淡橙色、灰白色 内面：浅黄橙色	外面：ナデ、把手（貼付） 内面：ナデ、クシメか（風化著しい）	
3	2区	SD2	土師質土器	すり鉢	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面:指頭圧痕、沈線（4条）、凹線（2条） 内面：ハケメ、クシメ	
4	2区	SD3・4	白磁	皿	口径：— 器高：残存1.7 底径：(6.8)	密	良	外面：灰白色 内面：灰白色	外面：施釉（透明釉） 内面：施釉（透明釉）	
5	2区	SD5	磁器	瓶	口径：— 器高：残存3.0 底径：(5.4)	密	良	外面：明緑灰色 内面：にぶい橙色	外面：施釉（透明釉） 内面：無釉	肥前系 仏花瓶か 17世紀後半～18世紀前半
6	1区	SD13	土師質土器	甕	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰白色 内面：灰白色	外面：ナデ、沈線（1条）、菊花文 内面：ナデ、ハケメ	菊花文：直径1.5cmのスタンプ
7	1区	SD13	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面：ナデ 内面：ハケメ	
8	1区	SD13（検出面）	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：灰黄褐色、黒褐色 内面：にぶい褐色、灰黄褐色	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ハケメ	
9	1区	SD13（上層）	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい黄橙色 内面：灰白色、橙色	外面：ナデ 内面：ハケメ	外面にスス付着
10	2区	SX1（下層）	土師質土器	鍋	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄褐色	外面：ナデ、一部にハケメ 内面：ハケメ	外面にスス付着
11	2区	SX1	陶器	皿	口径：— 器高：残存1.6 底径：(4.0)	密	良	外面：浅黄色 内面：灰白色	外面：回転ナデ、一部に施釉（灰釉） 内面：施釉（灰釉）	肥前系（唐津） 17世紀初頭 見込に砂目
12	2区	SX1（下層）	陶器	皿	口径：— 器高：残存2.7 底径：(4.8)	密	良	外面：灰オリーブ色 内面：オリーブ灰色	外面：回転ナデ、施釉（灰釉） 内面：ナデ、施釉（灰釉） 底部：削り出し高台	肥前系（唐津） 17世紀初頭 見込と高台に砂目
13	2区	SX1（下層）	白磁	椀	口径：— 器高：残存2.0 底径：(4.4)	密	良	外面：明緑灰色、灰白色 内面：明緑灰色	外面：施釉（透明釉） 内面：施釉（透明釉） 底部：削り出し高台	肥前系 17世紀中葉 高い高台、高台内無釉
14	2区	SX7（下層）	青磁	椀	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：淡灰緑色 内面：淡灰緑色	外面：施釉、連弁文 内面：施釉	
15	1区	P129	土師質土器	杯か皿	口径：— 器高：残存1.4 底径：(6.2)	密	不良	外面：橙色 内面：橙色	外面：ナデ 内面：ナデか（風化が著しい） 底部：回転糸切り	
16	1区	検出面	土師質土器	皿	口径：— 器高：— 底径：—	密	良	外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	
17	2区	包含層	土師質土器	すり鉢	口径：— 器高：— 底径：—	粗	不良	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	外面：ナデ、指頭圧痕 内面：ハケメ、クシメ（2条1単位）	
18	2区	包含層	備前焼	甕か壺	口径：— 器高：残存2.7 底径：—	密	良	外面：青黒色 内面：明赤灰色	外面：— 内面：回転ナデか	

Ⅴ　ま　と　め

妙福寺は、現在は、東広島市八本松南一丁目に所在する日蓮宗の寺院である。縁起によると､元は飯田村中畝（八本松飯田七丁目）にあり､南北朝時代の開基と伝えられる。遺跡の北方に所在した清滝一二坊と称する寺院跡(1)の子院であったと言われ、江戸時代の初め頃現在地に再建されたようである(2)。

今回の発掘調査は、団地造成に伴って寺院跡を含む集落跡「妙福寺遺跡」の一部を対象として実施されたもので、その成果を概観してまとめに代えたい。

遺構について

今回の発掘調査によって検出された遺構のうち、２・３の問題を紹介したい。

先ず、３区で検出した道路状遺構SF１及び掘立柱建物跡SB１である。SF１は、断面がカマボコ状を呈する南北方向の道路状遺構である。調査区北側の石垣に囲まれた一段高い区画（写真５の左側）は境内地と考えられ、その中に寺院が建っていたと推定されるが、その区画に向かって真っ直ぐ伸びる道路状遺構SF１を参道だとすると、その道と並行するように建っていた掘立柱建物SB１は､“門前に開かれた市”(3)の存在を伺わせる。ただし、SF１からピットが数基検出されており、SF１とピットに時間差があったと考えられる。なお、それらのピットとSB１の柱穴は同じ検出面ではあるが、堆積土も削平された遺構面であり、時期差は不明である。

次に、１区のほぼ中央で検出された土坑SK５である。平面形が隅丸長方形を呈し、拳大～人頭大の焼けた石と焼土及び炭化物が検出されている。「火葬墓」の可能性も否定できないが、土坑周囲が赤変していないこと、２次的に被熱した壁土が出土していることなどから「火災処理土坑」なども想定しておく必要がある。今回の調査では、１基しか検出されておらず、類例を待って検討したい。

最後に、性格不明遺構群と溝状遺構群である。

遺跡の東側を、何度も大きく抉るように構築されている。堆積土の観察から、耕作と埋め立ての繰り返しが行われたことが判明した。また、溝状遺構群１の溝は、水田法面の下に設定される水路と考えられ、SX１とSD１のように性格不明遺構と溝状遺構がセットであったと考えるのが自然である。そのように考え、セット関係と切りあい関係をまとめると、

（新）　SX１：SD１ ‖ SX４　←　SX３：SD３ ‖ ？ SX４～７　←　SD４ ‖ ？ SX２：SD２・７　←　SE１・SD８　（旧）

※戦国～江戸初頭　　※中世後半

となり、概ね中世後半～近世初頭頃に繰り返し構築されていることが分かる。

遺物について

出土した遺物は、何れも図示し得ないほどの小破片がほとんどであった。その多くは、２区の性格不明遺構群の下層（地山の検出作業中）から出土したものである。種別は、ほぼ土師質土器が占め、陶磁器（輸入・国産）の他は木製品・金属製品が１点ずつ出土している。比較的年代が特定しやすい陶磁器を見てみると、

１：15世紀前半～ 15世紀中葉「雷文を有する青磁碗」
２：15世紀～ 16世紀前半「蓮弁を有する青磁碗」
３：16世紀「白磁皿」
４：17世紀前半（唐津・初期伊万里）
５：江戸時代後半～明治時代（肥前系陶磁）

が出土している。これら陶磁器類は数点程度しか出土していないが、大半を占める土師質土器などの出土状況から、中世の後半が出土遺物の中心と考えられる。

次に、１区の表土とSD13、SK５から、焼成粘土塊が少量ながら出土していることに注目したい。２区の表土から若干の出土があるが、ほぼ１区（今回の調査区北半）に限定されている。この焼成粘土塊を観察すると、スサ及び竹と考えられる痕跡が確認できることから、これらは壁土であったと考えられ、２次的な被熱を受けたものと推測される。

また、壁土以外の出土遺物は土師質土器と若干の陶器である。図示したSK５：第13図２は中世のものと考えられるが、SD13：第13図６ ～ ９を見ると江戸時代に入っていると考えられる。

焼成粘土塊は、１区の周辺に壁土を持った建物が存在していたが、江戸時代に火事などで焼失したものの可能性が指摘されよう。

歴史的背景について

『芸藩通志』(4)によると、「妙福寺（法華宗） 原飯田村にあり、藏田備中、建立す、後妙滿寺の僧、日誠、再興す」と書かれている。また、『芸藩通志』の絵図（第14図）には「妙福寺（跡ではない）」は２か所に記載があり、一方が八本松飯田七丁目（飯田村中畝：調査区）、一方が八本松南一丁目（現在地）と推測できる。

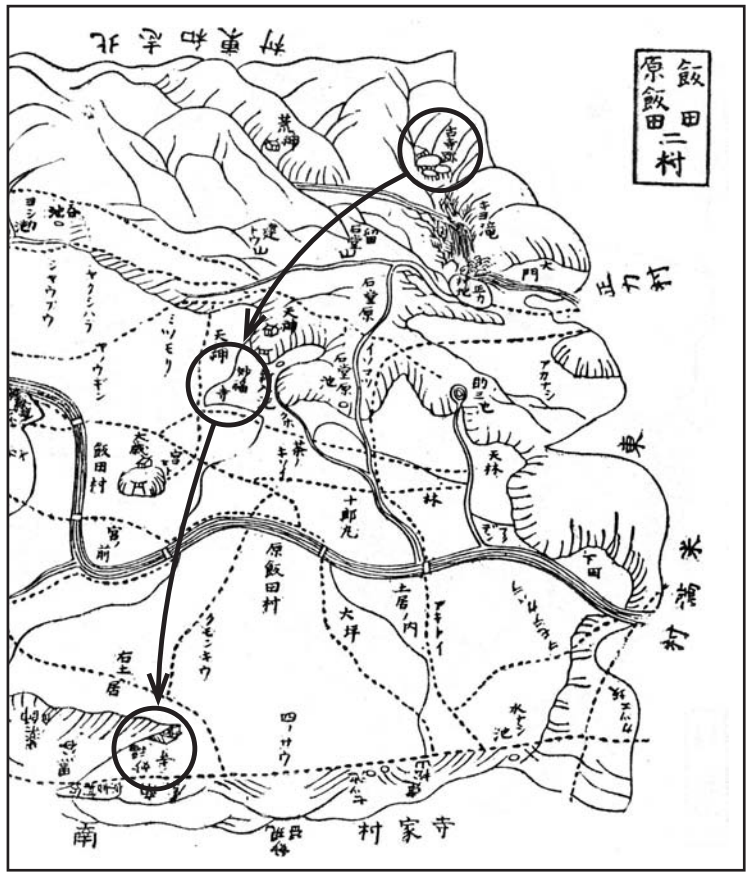
清滝十二坊の一寺と言われている妙福寺であるが、清滝十二坊と伝わる寺院跡（周知の埋蔵文化財包蔵地としては「清滝遺跡」である。）は、深堂山（597．８ｍ）と南城山（560ｍ）の間を南流する清滝川沿いに広がっており、石垣・礎石・石造物などが点在していることが確認され、経塚も発見されている。この清滝遺跡（清滝十二坊古寺跡）は、清滝城跡の城主が八幡菩薩を勧請して祈願所としたとも伝わり、大門原・金剛谷・光堂寺・鐘つき堂・荒神谷・観音谷・権現谷・地蔵谷・寺屋敷などの地名が残っている。

また、寺の前の小堂にまつわる南北朝期の伝承(5)が幾つかあるように、南北朝時代には飯田村中畝（調査区）に存在していたとみて間違いないであろう。これは、出土遺物の年代観とも合致する。

戦国時代の中頃になり、大内氏の代官として鏡山城にいた藏田備中守が妙福寺に帰依

して堂を再建した頃は、僧坊が八坊あり、門前には市が開かれ賑わっていたようである(6)。

しかし､蔵田氏が大永三（1523）年に尼子氏に攻略されたことに起因するかは不明であるが、妙福寺は衰退したようである。その後、京都妙満寺の貫主日誠（日栄か？）が毛利氏に寺領の復活と寺の再興を訴え、寺の再興は許されている。しかし、福島氏に代わって広島藩に入った浅野氏の家臣である大橋一(市)郎左衛門が、原飯田村に知行を許された際(7)、妙福寺の再建を藩に願い出て、現在の地に建立したということは、江戸時代の初め頃（寛永年間か？）には、既に荒廃していた可能性が高い。



第14図　『芸藩通志』絵図(部分)

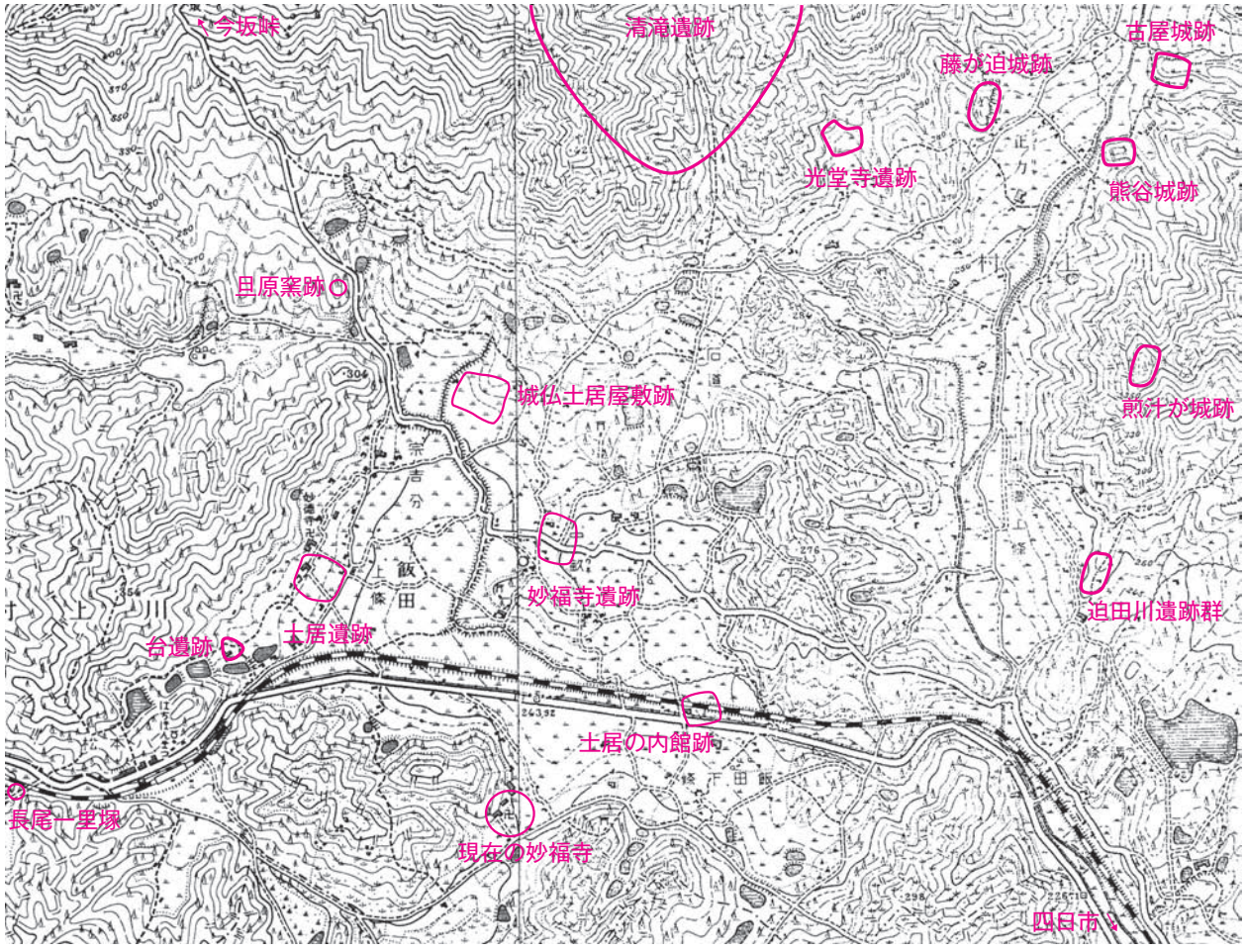
小堂について

開発区域内に石積みの基壇が存在した。この基壇は、上記した皇子の冠を納めたと伝承のある祠が祀られていたとするものの可能性が高い。しかし、現状（発掘調査前）では祠は存在せず､コンクリート製の碑が建っているだけで､石積みもかなり乱れている。また、旧境内地と考えられる現個人住宅の屋敷地を取り囲む石垣の積み方とよく似ていることなどから、何度も積み直されたと考えられ、現状の基壇は中世まで遡る可能性は低いと判断される。

ちなみに、昭和35（1960）年発行『川上村史』内の写真（475頁）には碑は写っておらず、剥がれ落ちたコンクリート片に「持明院統伝承」「妙福寺跡」「東広島市教育委員会」の文字が読めるが、昭和49（1974）年市制施行の市教委にはこの碑の建立に関わった職員がいない。この前後に何らかの整備がなされたと推測されるが情報が残っていないため詳細は不明である。

山陽道とされる道について

妙福寺遺跡のほぼ中央を東西に横断する、幅約１．５ｍの道について整理しておく。地域住民からは「山陽道」と呼ばれ、古くから使われていたようで、中世山陽道と認識されている。



第15図　遺跡周辺地形図（1：25,000）　明治33(1900)発行の旧版地図を使用
大日本帝国陸地測量部発行地形図「一貫田」・「西條町」を縮小して妙福寺遺跡周辺の主要な中世遺跡を加筆

国土地理院が保有する旧版地図（明治31（1898）年測量、明治33年発行）「一貫田」・「西條町」(8)（第15図）を見ると、調査区付近を東西方向に道が横断するように記載され、『芸藩通志』の絵図（第14図）にも破線で示されており、街道の存在が推測される。また、周辺には土居屋敷跡や城跡などが多く存在し、当該地域が中世において要所であったことが良くわかる。

なお、島津家久がお伊勢参りの様子を書き留めた日記(9)には、「今坂といえるを越候て（中略）猶行てさいちゃうの四日市といえるを打過（後略）」とある。地形的に見てもこの道を使っていたと推測され、当時の主要な街道であった可能性が高い。

前述のように『川上村史』・『芸藩通志』によると「門前にも市が開かれるなどして賑わった」とされ、飯田村には「市尻」・「市頭」・「市原」という地名が残っていたとされる。これらの場所を特定することはできなかったが、今回の調査地点は小字（現在は使用していない。）が「市原」であった。現存する地名などから想像すると、中世山陽道とされる道と妙福寺境内地の間には市が開かれており、SB１がその建物の一部であったと推測することは十分に可能である。

ちなみに、江戸時代の妙福寺は近世の西国街道沿いに再興されている。中世山陽道沿いに存在していた妙福寺は、火災と街道の付け替え(10)によって衰退したと想定することは飛躍的すぎるであろうか。

この小道部分は開発範囲に入っているが盛土となるため、発掘調査の対象から外された。しかし、擁壁の一部が工事の対象となっており、立会をすることとなった。その結果、表土の直下で地山土が露出し、その両側が落ち込む断面カマボコ形を呈することが判明した。これは、調査区内のSF１と同様、道路部分を残した両側を耕作地として利用するために掘削した結果と考えられる。なお、路盤部分の硬化や側溝などの施設は検出されていない。立会の結果からは積極的に中世山陽道とする確証は得られなかったが、何らかの街道が存在していたことは間違いないであろう。

まとめ

上記のことから寺院跡を含む集落跡「妙福寺遺跡」について、まとめてみる。

出土遺物からは、「贅沢品である輸入陶磁器が存在する」こと、「中世～江戸時代初期の遺物が大半である」こと、「江戸時代～近代の遺物が散見される」ことが判明した。縁起などから、寺院としては、今回の調査地点には南北朝時代から江戸時代初め頃までしか存続しておらず、その後開発前の所有者の先祖が移り住み現在まで居住していることが分かる。これらを総合的に考えると、中世～江戸時代初期には寺院を含む集落が盛衰しながらも存在し、寺院の移転後も集落は営なまれていたと推測できる。

今回の発掘調査が「妙福寺旧境内地」の中心部分を対象としていないため、寺院の創建時期や伽藍の様子などについては確認できなかったが、寺院の周辺には集落が存在し、その盛衰の様子を知ることができた。また、これまで埋蔵文化財としてあまり認識されてこなかった中近世の街道などは、集落遺跡の存在と密接に関係しており、今後は注視していく必要があろう。

註

(1)福原家文書に「西条原村内天野讃岐守殿跡(中略)同清滝寺領事(後略)文明三(1471)年十一月六日　道秀」と記載がある“清滝寺”が清滝十二坊を指すと考えられ、15世紀後半には存在していたことは間違いない。
『福原家文書』上巻　渡部翁記念文化協会1983

(2)『広島県川上村史』川上村史刊行会1960

(3)(2)に同じ

(4)『芸藩通志(復刻版)』芸藩通志刊行会1967

(5)「持明院第六皇子が妙福寺に住していたが亡くなったため冠などを埋めた」説、「後醍醐天皇が四国に落ちる際、敵を欺くために冠を埋めた」説、「この地に流された後醍醐天皇第六皇子が妙福寺で亡くなったため生前使用していた冠とその紐を祀った」説などがある。※古老の話、川上村郷土史(『広島県川上村史』から)

(6)(2)に同じ

(7)寛永11(1634)年6月には浅野光晟より276石4斗2升6合を原飯田村内に許されている(『広島県川上村史』から)

(8)大日本帝国陸地測量部の2万分の1地形図(明治31年測量、明治33(1900)年発行)「一貫田」・「西條町」

(9)『中書家久公御上京日記』(7)(天正3(1575)年)広島県『広島県史』中世資料編Ⅰ　1974

⑽ 寛永10(1633)年に幕府巡見使を迎えるにあたり「道路幅を西国街道2間半、石見・出雲路7尺、村伝いの小道3尺と定めるなど、領内道路網の整備が一挙に進められた」と言う(広島県『広島県史』近世Ⅰ 1981)。西国街道の整備が、中世山陽道を付け替える契機になった可能性がある。

参考文献

『広島県の地名』日本歴史地名体系35 平凡社1982
飯田米秋『賀茂郡史』(中世武士編) 東広島ジャーナル1984
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社1995
『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会2000
狭川真一『中世墓の考古学』高志書院2011

図　　版

祠があったとされる基壇と3区SF1完掘写真（南から）※奥の石垣が旧境内地と考えられる

a. 1区完掘近景（東から）

d. 1区SK4 ～ 6断面（東から）

e. 1区SK5焼石・炭化物出土状況（東から）

b. 1区SK7断面（東から）

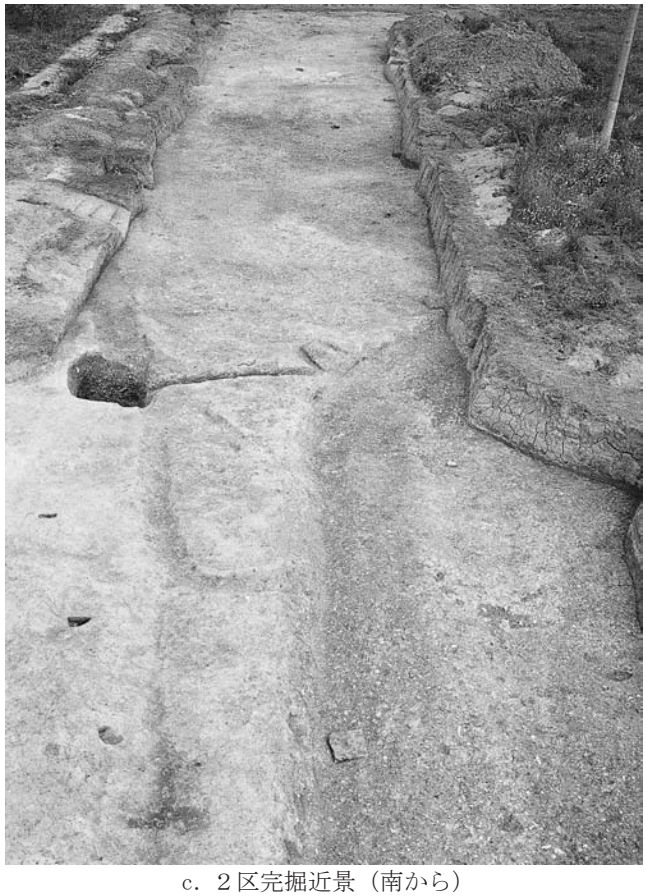
f. 1区SK5完掘（東から）

c. 1区SK8断面（北から）

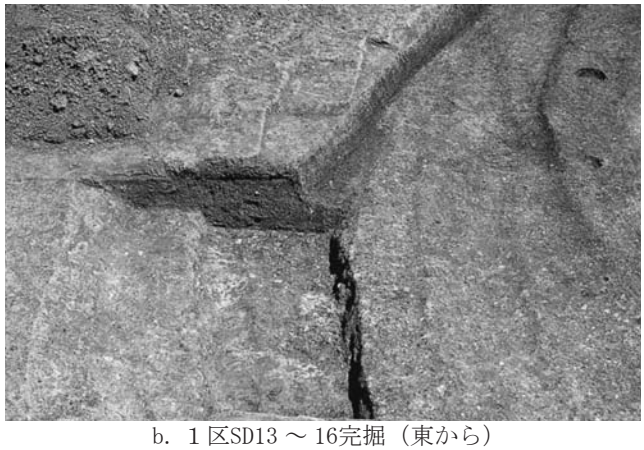
g. 1区SX8完掘（南から）

図版2

a. １・２区完掘近景（北から）

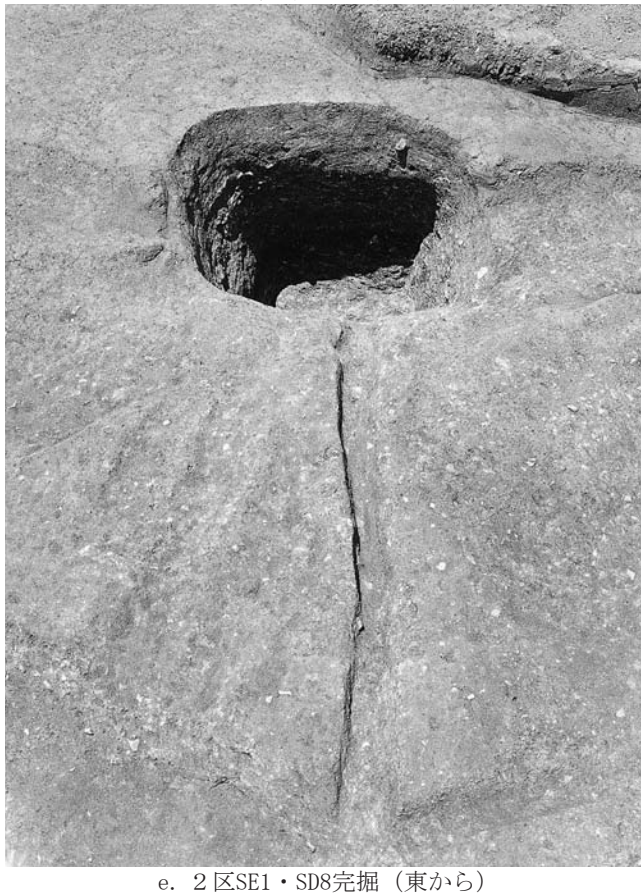


c. ２区完掘近景（南から）



b. １区SD13 ～ 16完掘（東から）

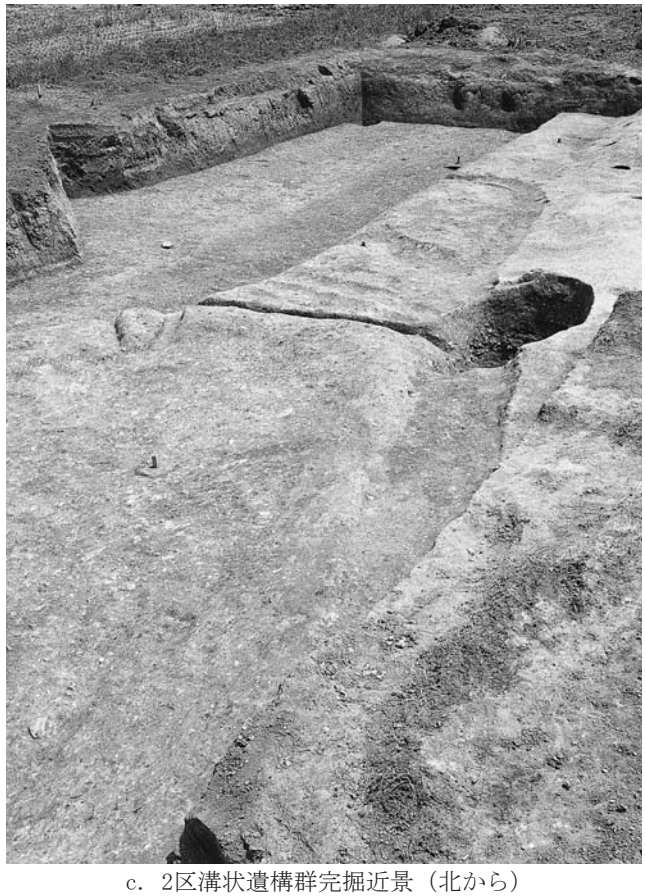
d. ２区SE1断面（南から）



e. ２区SE1・SD8完掘（東から）

a．2区溝状遺構群断面（南東から）

b．2区SK3完掘（東から）



c．2区溝状遺構群完掘近景（北から）

d．3区完掘近景（西から）

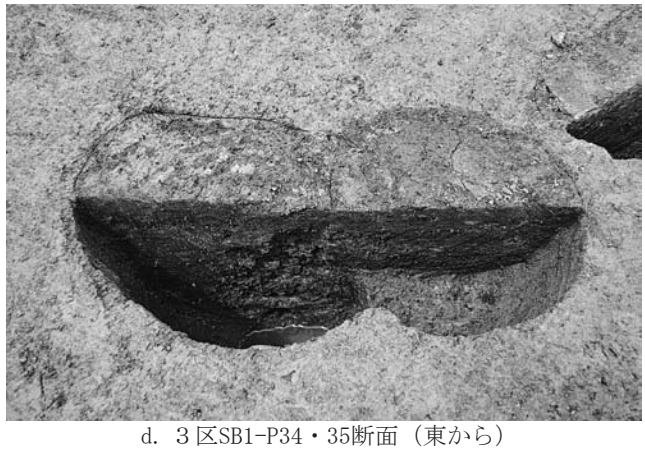
e．3区SF1完掘（南から）

図版4

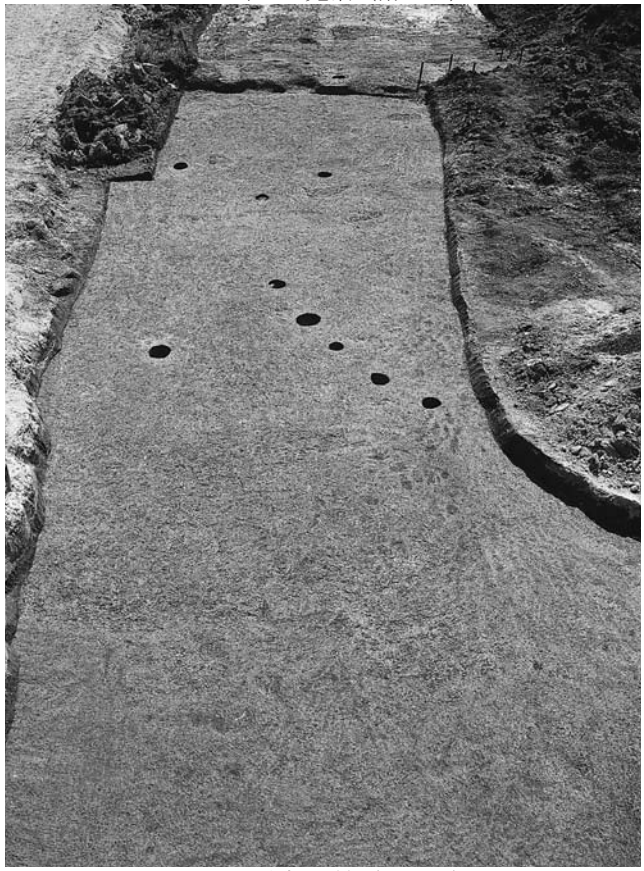
a. ３区SB1完掘（南から）

b. ３区SB1-P29断面（東から）

c. ３区SB1-P30断面（東から）



d. ３区SB1-P34・35断面（東から）



f. ４区完掘近景（西から）

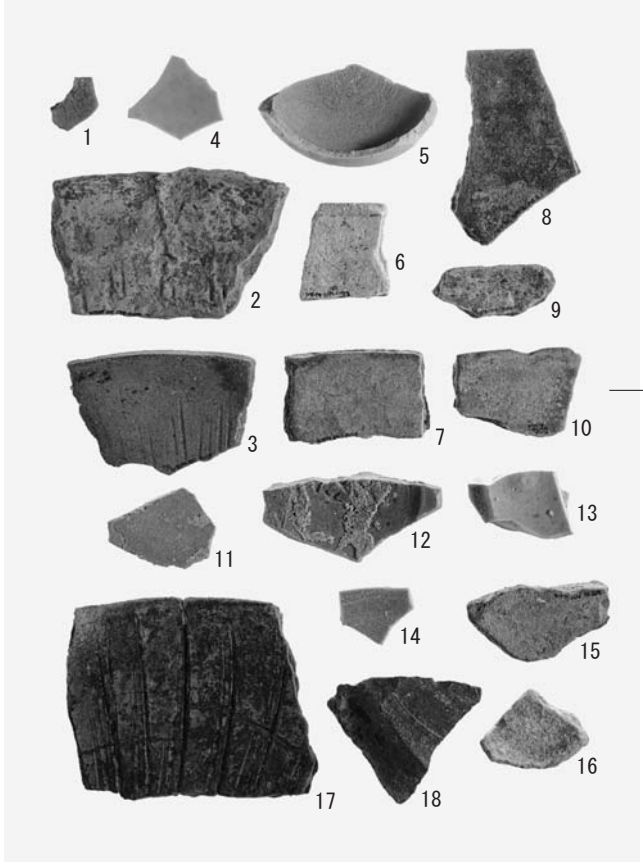
e. ２区SK2断面（東から）

a．擁壁工事立会状況（西から）

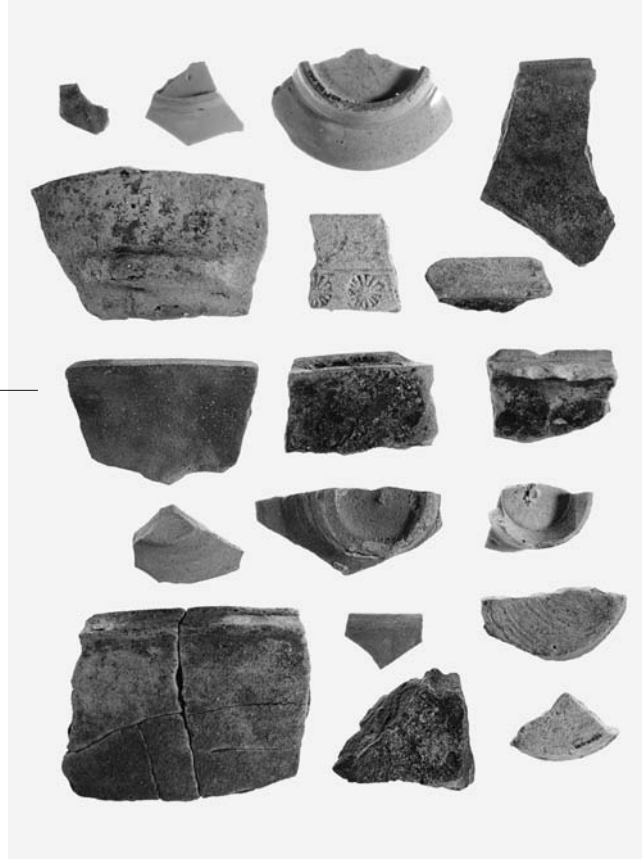
b．擁壁工事立会状況（東から）

c．街道の現状（遺跡の西側から）

d．妙福寺古墓



e．出土遺物



f．出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	みょうふくじいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	妙福寺遺跡発掘調査報告書
副書名	八本松飯田宅地開発事業に係る発掘調査
巻次	
シリーズ名	東広島市教育委員会文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	石垣敏之、吉田由弥、日浦裕子
編集機関	東広島市教育委員会
所在地	〒739-2201　広島県東広島市河内町中河内651番地７　TEL 082-420-7890
発行機関	東広島市教育委員会
所在地	〒739-8601　広島県東広島市西条栄町８番29号
発行年月日	西暦2017年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みょうふくじ 妙福寺 いせき 遺跡	ひがしひろしまし 東広島市 はちほんまついいだ 八本松飯田 ななちょうめ 七丁目	34212	159	34° 27′ 08″	132° 42′ 06″	20150415 ～ 20150610	950㎡	団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
妙福寺遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡　１棟 溝状遺構　16条 井戸　１基 土坑　８基 道路状遺構　１条 性格不明遺構　８基 ピット	土師質土器 陶磁器 木製品 金属製品	中世後半から江戸初期頃の寺院跡を含む集落遺跡

要約	縁起には南北朝に開基し江戸初期頃に移転するとされているが、今回の調査成果でその盛衰の様子が確認できた。また、参道と考えられる道とその道に直交する掘立柱建物跡を検出するなど、寺院跡を含む集落遺跡の一端をうかがうことができた。

東広島市教育委員会文化財調査報告書　第56集

妙福寺遺跡発掘調査報告書

発　行　日　　2017（平成29）年３月31日

編集・発行　　東広島市教育委員会
〒739-8601広島県東広島市西条栄町８番29号

印　　刷　　山脇印刷株式会社
〒725-0003広島県竹原市新庄町29